IS(インフィニット・ストラトス)　勇者光臨

ガオガイガー最高！ジェネシック最高！！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ（インフィニット・ストラトス）　勇者光臨

【Ｎコード】
Ｎ９４１０Ｙ

【作者名】
ガオガイガー最高！ジェネシック最高！！

【あらすじ】
君達に最新情報を公開しよう彼の名は獅子王　聖心彼は彼女とのデート中に彼女を助けるために死んだラストは口付けで彼の人生は終着駅に着いたが彼は神によって転生を果たす
そして我等が勇者　獅子王　凱を相棒に
ＩＳ世界に勇気を巻き起こす
そして彼は勇者王を操る勇者となる
ＩＳ（インフェニット・ストラトス）　勇者光臨
君もこの小説にファイナルフュージョン承認！！

俺と凱

ズズズッ・・・ゴ・・・クッ
適当に店で買った紅茶を飲みながら新聞を読む
・・・よし宝くじ1等当たった

『今さり気なく凄い事言ったよな?』
「そうか?あっ2等と3等も当たった」
『・・・牛丼食べて良いか?』
「宝くじから一気に牛丼かよ!?」

俺の名は獅子王　聖心
俺の名は親が本当は清らかな心で清心としたかったらしいが
間違えてこうなったらしい
因み牛丼の話をしたのは俺の相棒　獅子王　凱だ
つっても凱はＩＳのＡＩだがＧストーンの力を使って実体化が可能
何それ恐い・・・
因みに俺は前世の記憶がある
いわゆる転生者だ
はいはい皆様うわぁ～・・・有りがちとかお思いでしょう?
それは作者に文句言ってください
まあそれはさて置き俺はなんと彼女とのデート中に彼女が車に引かれそうになったんで
俺が思いっきり突き飛ばして助けては良いんですけど
代わりに俺が死にました
で・・・最後に深くて熱いキスをして俺は息絶えました
ほんでお次は目を開けたら土下座してるじいさんがいました
俺はなんか死ぬはずじゃあなかったので俺はＩＳ世界に転生する事にが俺を死なせて詫びとして特典もらいました

それは俺が生前彼女と共にハマっていた
『勇者王　ガオガイガー』を貰いました
でもねなんと！全ガオガイガーになれるという最高なものに！！
しかもサービスでＡＩとして獅子王　凱をつけてくれました
ついでに適正はＧＧＧ　ＳＳＳの上らしいです
でもＧがなんでＳより上なんだ？
良いんだよ！！Ｇが最高なんだよ！！！
え？身体能力は良いのかって？
大丈夫だよ俺リアルバグチート人間って言われてて
勇者って異名有ったから
最高じゃね！？異名！！？？
後獅子王って名字も前世からだぜ？
いや本気（マジ）で

「・・・あっ・・・」

気づくと凱は紅生姜をてんこ盛りにのせた牛丼に更に唐辛子をかけていたが
蓋が外れてドパッて感じで出た

「・・・いける？」
「・・・見せてやるさ・・・勇気を・・・」
「確かに勇気要りそう・・・」

そう言って一気に牛丼を食べる

「・・・ど、どう？・・・」
「・・・う、美味い！！！」
「マジですか！？凱機動隊長！？」
「ああ！！こんな事ならゆっくり食べれば良かった・・・」

「お代わり準備しとくよ」
「おお！有難う！！」

クラスメイトに男子一人

どうも獅子王　聖心です
俺は今ＩＳ学園に居ます
クラス中の女子から視線を集めている状況です

『精神的に辛くないか？』

問題ない彼女の泣き顔に比べたらどうって事ない

『泣き顔に弱かったんだな』

ああこの世が終わるみたいな顔するからさ
なんかそんな顔見たくなかったんだ・・・

「し・・・獅子王君！」
『心呼んでるぞ』
「あっはい（サンキュ凱）」

俺の目の前には明らかに童顔な先生が居た
・・・女性としての部位が異常だな
興味ないけど

「あ、あの獅子王君の挨拶の番なので・・・そのぉ・・・」

もじもじしながら小声で俺に話す先生

「解りました
俺の名前は獅子王　聖心

年は１８歳
ＩＳが動かせると解って転入させられた者だ
趣味はお菓子作りに読書、音楽演奏主にやるのはオカリナとチェロだ」
「え！？年上！」
「お兄様ぁぁ～！！」
「私のために愛の曲を奏でて～！！」

俺の周りの女子に騒がれた

『凄いなこれは』
「（凱はなかったのか？）」
『ああ俺にはなかった』

そしてＳＨＲは終わり休み時間無しで１時間目が始まり
授業は終わった
俺が椅子に腰かけているとある奴が近づいてくる

「あの獅子王先輩？」
「君は確か・・・織班君だったかな・・・？」
「あ、そうです先輩は今までは何処の高校に行ったんですか？」
「（凱何処だったけ？）」
『藍越学園だろ？』
「（ああサンキュ）藍越学園だ」
「え！？マジですか！？俺もそこに受験しようと思ったんですけど受験場所を間違えてＩＳ触っちゃってここに居るって事です」
「ああなるほどＩＳと藍越って似てるからね」
「そうですよね後俺の事は一夏でいいっす」
「俺の事は聖心でいい」
「はい聖心先輩」

「ちょっといいか？」

すると一人の女子が話しかけてきた

「箒？」

「話がある」

「あ、ああじゃあちょっと行ってきます聖心先輩」

「ああ、いってこい」

一夏は彼女に連れられ教室を出て行った

そして二人は授業が始まる前に戻ってきた

そして授業がスタートした

が2時間目が終了し俺が一夏と話していると・・・

「ちょっとよろしくて？」

髪がロールヘアーの女の子が話しかけてきた

「え？」

「ん？」

「まあ！なんですの！そのお返事は？

私に話しかけられるだけでも光栄なのですからそれ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

「イギリスの代表候補生セシリア・オルコット」

「あらそちらの方は知っているのですね？」

「まあなイギリスの代表校候補生だろう」

「質問いい？」

「下々の質問に答えるのも貴族の役目ですわ」

「嫌俺は先輩に聞いたんだけど・・・代表候補生って何ですか？」

俺は解っていたが軽く呆れた
セシリアは軽く怒った

「あなた本気で仰ってるますの！？」
「おう知らね先輩お願いします」
「はいはい簡単に言えばＩＳの国家代表生の候補生さ
まあ傍から見ればエリートだな」
「へぇ～」
「そうですわ！エリートですわ！貴方方とは違う入試試験で
唯一教官を倒したエリートなのです！！」
「俺も倒したぞ教官」
「同じく」
「え！？」

セシリアは声を上げた

「私だけと聞きましたが？」
「女子だけで事だろ？」
「男子は別だって事だろ？」

ピシッ
セシリアの額に何かが走った
その時チャイムが鳴った

「くっ！覚えてらっしゃい！！」

セシリアは自分の席に戻っていた

「一夏も席に戻れ」
「はい先輩」

一夏は自分の席に戻った

勇者王誕生！

先程の授業でクラス代表を決めるはずだったんですが
女子が推薦したのは俺と一夏
それに異論を唱えたのはセシリアだった
それで俺と一夏は１週間後戦う事になった

『・・・心・・・』
「（どうした？凱？）」
『俺達の部屋ってどうなるんだろうな・・・』
「（でもさ凱は良くね？ＡＩだし）」
『まあそうだが・・・牛丼はどうしたらいいんだ・・・』
「（どんだけ好きなんだよ・・・）」

この後山田先生が来て俺は一人部屋という事になった
１０２６室だ
俺は廊下を歩き部屋を探す
さっきから異常に凱の機嫌がいい
１人部屋だから実体化できるからだろう

「ここか・・・」

俺はドアを開けて中に入った
・・・ゴシゴシ・・・・・豪華すぎじゃね？
キッチンにパソコン、ソファー、ベットその他色々
無駄に金がかかってるな

「さて食材送って置いたし飯作るか」
『俺は牛丼で』

「言わずもがなだ」

凱は栄養管理とか空腹にはならないがちゃんと食事は取る
ＡＩなのにね
後仕込みをしてる時に隣の部屋が騒がしかった
今夜の夕食は凱のリクエストの牛丼
最近なんか牛肉の消費量が半端ない気がする
月に何キロ使ってるんだろ・・・
金は神のサービスで兆を越える額があるから問題ないけどね
俺のは大盛、凱のは特大盛＋てんこ盛り紅生姜＋てんこ盛り唐辛子
見てるだけ口の中が酸っぱくなったり辛くなったりした
因みに凱は数回お替りをした
食い終わったら凱はホログラムモードになりベットに寝そべる
・・・データウェポンですか？
俺は自分でＩＳのメンテをする
・・・

「う～ん・・・」
「どうしたんだ？」
「クラス代表を決める戦いが有るんだけど
どうも起動できるのがギャレオンとファントムガオーだけなんだ」
「ガオーマシンが使えないか・・・ちょっと厄介だな」
「ああ、ファイナルフュージョンが出来ないとなるとちと厄介だ
どうもエラーが有るみたいなんだ」
「どれどれ？」

凱はＡＩ状態に戻りガオーマシンをチェックする

『・・・これなら１週間も有れば大丈夫だ最近メンテしてなかったからな』

「そうか、つか凱なんで言ってくれなかったんだよ？」
『・・・スマン忘れた・・・』
「まあいいや」

俺はそのままベットに入った
・・・そして１週間後・・・
一夏は幼なじみである箒に特訓を受けていたらしい
だけどほとんど剣道だったらしい
がここで問題発生
一夏の専用機がこない

「ど、どうしよう・・・」
「まあ落ち着け焦っても何も変わらない」
「獅子王、お前の専用機に来ないのだぞ？」
「いいですよもう有りますし」
「「ええ！！？」「何！？」」
「事前にもらってます」
「そ、そうか・・・」

すると山田先生が息を切らしてやって来た

「織班君！きみの・・・ＩＳ・・・が届きました・・・」
「え！？本当ですか！？」
「はい！これが君のＩＳ！白式です！」

そこに有ったのは何処までも真っ白なＩＳ

「これが・・・俺の・・・」
「獅子王お前が先やれ」
「はい、フォーマットとフィッティングですね？じゃあ・・・」

俺はギャレオンを象ったブレスレットを出す

「『ギャレォォォン』！！！」

俺が叫ぶとギャレオンが現れる

『グォォォン！！！』

「うぉぉ！！？ラ、ライオン！？」

「何だこいつは！！？」

「何でいきなり！？」

「いくぞギャレオン！！」

『グォォン！！』

「フュージョン！！」

俺はジャンプし体を丸めるそれをギャレオンが取り込み

変形を開始

ギャレオンの頭部は胸部になり

そこから人型の頭部が現れる

前足は手となり

後ろ足は人間のように真っ直ぐとなった

そして頭部のGストーンが光る

「ガイガー！！！」

「すっげぇぇ！！！」

「なんて展開の仕方だ・・・」

「じゃあ先にいくぞ」

俺は脚部のスラスターを吹かしアリーナに向かう

そこには既にセシリアがスタンバっていた

「あら逃げたのかと思いましたわって全身装甲（フルスキン）！？」
「誰が逃げるか準備はいいか？」
「はいいつでも」

そして試合は始まった
セシリアはライフルで俺を捉えようとする
俺はスラスターを吹かし地上ギリギリで避ける

「くっ！ちょこまかと！」
「当たってやるほど俺は優しくない」
『心！』
「（なんだ凱！）」
『ステルスガオー、ドリルガオー整備完了！ライナーガオーは3分待ってくれ！！』
「了解！」
「何をブツブツと私とブルー・ティアーズの奏でるワルツで踊りなさい！！」

ビットのようなものを放ってくる

「生憎俺はダンスは苦手だ、ステルスガオー！！」

ビットの攻撃が届く寸前にステルスガオーとドッキングし攻撃を避ける

「なんなんですの！？それは！？」
「こいつはＩＳの一部だ」

ステルスガオーで格段に向上した機動性でどんどん避けていく

そして試合開始から２９分　先程から3分経った

『ライナーガオー整備完了！』

「おっしゃぁぁ！！！ガオーマシン！！！」

地面からはドリルガオーが顔を出した

そしてどっからかライナーガオーが出てきた

「なんなんですの！？」

「いくぞ！！」

ステルスガオーをパージする

「ファイナルフュージョン！！」

腰のスラスターからＧＳライドのスモークを回転しながら噴出する

その中にドリルガオー、ステルスガオー、ライナーガオーが入ってくる

腰を回転させドリルガオーと連結する

腕を背に移動させ肩からライナーガオーが入る

そして背にステルスガオーがドッキングした

ギャレオンには鬣が付けられステルスガオーから腕をドッキングし兜が頭部に着く

「ガオ！ガイ！ガァァア！！！」

勇者王の力

スモークが消えガオガイガーの姿がアリーナ全員の目に露になる
背についたステルス
胸部にはギャレオン
膝にはドリルがついている

「ま、まさか一次移行（ファーストシフト）!?初期設定であそこまで戦っていましたの!?」

「嫌全然違うけど・・・」

「ですがただ大きくなっただけでは私には勝てませんわ!!」

ライフルとビットを使い一点集中で攻撃してくる

「プロテクトシェード!!」

防御フィールドを展開し撃ってきたエネルギーを増幅し星の形にし跳ね返す
それはそのままセシリアに直撃した

「きゃあ!!」

「まだまだ!!」

右腕を高速回転させながらGストーンのエネルギーを充填させる

「ブロウクンマグナム!!」

ロケットパンチのように腕を打ち出す

「な、なんですてぇぇ！！！」

セシリアは驚きを隠せず慌しく避けるが弧を描き
ブロウクンマグナムはセシリアにヒットした

「きゃあぁぁぁ！！！」

あっという間にセシリアのエネルギー残量０
試合終了勝者　獅子王　聖心
がセシリアは何故か落ちてきた
軽くスラスターを吹かし下に回りこみお姫様抱っこのように受け止めた

「大丈夫か？」
「えあ、は、はい／／／／／／」
「なら良かったこのままピットに行くがいいか？」
「いえ！それでは・・・／／／／／／」

顔を赤くし手をモジモジさせる

「気にするな」

俺はお構い無しにセシリアをピットを運ぶ

「ではこれでなこれからは発言に気をつけろ」
「発言・・・ですか？」
「ああお前は国家代表生の候補生だろ？将来的に国家代表になるかもしれん」
「そうですわ」
「ならお前の発言はその国の発言になる

お前が罵倒すれば国が罵倒したのと同じ事になる」

そう言うとセシリアの顔は青くなっていった

「そういう事も考えろではな」

俺はピットを出た

この後原作どうりに一夏は負けた

整備室での出来事

模擬戦の後織班先生の許可を貰い
整備室でガオガイガーの整備をする事にした
まずはパソコンでガオガイガーをチェックする
・・・視線を感じる・・・

「（凱・・・）」
『ああ誰か見ている』

俺は振り向くと水色の髪に眼鏡を掛けている女の子がいた

「何の用だ？」
「・・・を・・・く・・・」
「何？」
「貴方の名前を・・・教えてください・・・」
「俺の？俺は獅子王　聖心だ」

とりあえず自己紹介

「更識・・・簪」
「君の名前かい？」
「（コクッ）」
「じゃあ更識・・・さん？」
「（フルフル）・・・簪でいいです・・・」
「簪ね、で何の用？」
「・・・その・・・オルコットさんとの模擬戦を見てて・・・
獅子王さんのＩＳがアニメのロボットみたいだで格好良いから・・・
その・・・もっと見たくて・・・／／／」

簪は頬を赤くする

「まあガオガイガーの元はアニメだしな」

「！！なんの・・・？」

「う～ん・・・口で言うより見てもらった方が早いかな？

まあこの後あいてるか？」

「（コクッ）」

「なら俺の部屋でそのアニメ見ないか？」

「！！いいの・・・？」

「ああ構わんぞ」

「ありが・・・とう／／／それと・・・ＩＳが見たい・・・」

「ああ解った」

俺はガオガイガーを合体状態で呼び出す

「！！」

簪は目をとても輝かせている

キラキラしてる

「好きなだけ見ていいぞ俺は整備してるから」

「！これを！？」

「あああまあな」

「私も・・・手伝っていい・・・？」

「あ、ああ」

俺はエネルギー系統を担当し簪は装甲を担当した

簪のおかげでだいぶ早く終わった

この後簪と俺の部屋で勇者王　ガオガイガーを鑑賞した

「！！・・・い、いい・・・（キラキラ）・・・」
「おお！解ってくれるか！」
「勇気・・・いい・・・」
「くぅ～解ってくれる人が居て良かった～！！」
「出る！！」
『ヘル・アンド・ヘブン！！』
「来るぞぉ！」
『ギム・ギル・ガン・ゴー・グフォ・・・』

この後徹夜で俺達はガオガイガーを鑑賞するのであった
簪が帰った後軽く凱に怒られた

クラス代表生

「一組のクラス代表は織斑君に決定いたしました！」
「へ？」

パチパチパチパチ
クラスの女子から拍手を浴びる一夏

「あの先生質問です！俺はオルコットに負けたし
ここは普通オルコットに勝った聖心先輩か俺に勝ったオルコットじゃないんですか！？」
「「ああそれは」」
「私と」「俺が」
「「辞退したから」」

息を合わせながら言う俺とセシリア

「なんで！？」
「私もあの時はかなり自分勝手に怒ってしまいましたしそれに聖心が辞退するなら私思いまして」
「俺がやったら一夏のこれからに響くと思ったからだまだまだ青いからな、戦闘経験を積む必要が有るだろうＡｒｅ　ｙｏｕ　ＯＫ？」
「ＯＫです・・・じゃあ出来ればご指導お願いします」
「任せろ、勇気を叩き込むからな」
「はい！！（ゆ、勇気？）」

そしてちょいと時間は流れ

「これより飛行訓練を開始する　織班、獅子王、オルコット前に出て展開して見せろ」

と言われたので俺達は前に出た
すると

「獅子王、お前のＩＳは一々アレをやらなくていいかんのか？」
「フュージョンとファイナルですか？いえ任意です」
「そうかでは合体状態でいけ」
「はい」

セシリアはさっさと展開し俺もステルスガオーＩＩにしてガオガイガーを展開する
が一夏は慣れていないせいかモタついている

「一夏相棒を呼び出す感じだ」
「（相棒・・・来い！白式！！）」

すると一瞬にして展開された

「遅い」

容赦ない織班先生

「武装を展開してみろっが獅子王は常時展開か・・・」
「いえ武装は有ります」
「では見せてみろ」
「はい」

わずか０、０９で展開したのはディバイディングドライバー

「ほうどんな武器だ？」
「お見せしますよ」

一旦上昇し誰もいないグランドの位置に向かう

「ディバイディングドライバァァァ！！」

ディバイディングドライバーにパワーを充填させ地面に突っ込む
ババババババン！！！シュ～！！
すると地面に金色の光が走りガオガイガーを中心に１００ｍ伸びていく
そして地面が割れ丸く円になるように地面が割れた
みんなは呆然としている
俺はとりあえず先生の元に行く

「どうですか？」
「・・・どういう武器なんだ・・・」
「打ち込んだ地点を中心にした空間そのものを周囲へ押しのける事によって円筒形の戦闘フィールドを作り出し
被害を防ぐためのツールです
まあ戦闘フィールド自体は約３０分間しか持ちませんけど」
「・・・ではあれは放っておけば元に戻るのだな？」
「そうです」

先生はセシリアと一夏に向かい合い指導を始める
俺は最強勇者ロボの１体ゴルディを呼び出したい欲求を抑えていた
そして授業終了
俺は整備室に向かった
織班先生には許可は貰った

整備室には誰も居なかったから好都合だった

「よし凱いいぜ」
『了解、ゴルディマーグ展開』

その声と共に出てきたのは
黄金の重装甲
逞しい腕っ節
ガオガイガー戦闘時において最強のツールを使用するために開発された
ゴルディマーグ

「よおゴルディどうだい気分は？」
『聖心よぉ～呼ぶなら戦闘の時呼んでくれあの女光にしてやったによ』
『恐ろしいを言うなゴルディ』
「使ってよかったけどある意味で俺がタダじゃすまん
それに詫びにこれから高級オイルでピカピカにすんだからよ勘弁してくれ」
『おう！それなら良いぜ！！』

そして結局後の時間はゴルディ磨きに時間を費やすことになった

中国からの代表候補生とアンノウンＩＳ　勇者王新生

「転校生？」

一夏がすっとんきょうな声を上げた

「ああしかも中国の代表候補生らしいぞ」

「中国か・・・」

昨日の一夏のクラス代表決定パーティの翌日即ち今日

転校生がやって来る

まあ誰かは知ってるけど

俺は然り気なく耳栓を付け目を閉じる

「～～！！」

「～～」

「！？～！！！」

うん何か騒いでるね

メキャ！！

・・・あんな音出るか？普通？

俺は耳栓を外し目を開けた

すると箒が出席簿アタックを喰らっていた

「身から出た錆・・・」

『使いどころ合ってるか？』

・・・

「お前のせいだ！！」
「すげぇ理不尽だなおい！！」

食堂に向かっていると箒が一夏に文句を言った
ちなみにメンバーは一夏、箒、セシリア、俺だ
凱には今夜牛丼作るって事で納得してもらった
どんだけ好きなんだか・・・

「待ってたわよ！一夏！！」

代表候補生の鈴が現れた
が俺は普通にスルー
とっと食事を頼み食べ始める（耳栓付き）
そしてクラス代表戦
この戦いまでの日まで俺は一夏に勇者の何たるかとか
戦闘技術とかを叩き込んだ
俺は織班先生と山田先生と同じ部屋で勝負を観賞中
中々やるな二人共・・・

「中々やりますな一夏も鈴も」
「お前の教え方が良いようだな」
「俺は勇気を教えただけです」

が戦いの中に変化が起きた
謎のＩＳが乱入してきた

「なんだ？あのＩＳは？」
「織斑君！　アリーナから脱出してください直ぐに先生たちが制圧に行きます！！」

「ですけど先生シールドは解除不能ですよ、俺が行きます」
「ええ!?ダメです!!危なすぎます!!」

山田先生は俺の腕を掴み止める

「凱と俺(ガオガイガー)なら行けます許可をお願いします」
「・・・行けるか?」
「はい」
「なら行け、だがやるからには成功しろ」
「了解」

俺は一担、外に出た

「凱・・・任せるぜ・・・」
『任せろ・・・勇者として役目を果たす』

俺は髪を後ろで結んでいた髪留めを外し
長い茶髪が背に触った
俺の目の色は黒から青に変わる

「・・・心・・・後は任せろ」
『勇者の力・・・』

俺の意識はＡＩである凱と入れ替わった

「ファントムガオー!!」

凱が叫ぶと戦闘機状態のファントムガオーが現れる

「フュージョン！！」

凱はＧストーンの力を使いファントムガオーのハッチからファントムガオーと融合した
ファントムガオーの形状は変化し人型となった

「ガオファー！！」

ガオファー
ガオファイガーのメインブロックを構成する、その戦闘能力はガイガーを凌ぐ

「ガオーマシン！！」

凱が叫ぶと

ドリルガオーＩＩ、ライナーガオーＩＩ、ステルスガオーＩＩＩが現れる

「ファイナルフュージョン！！」

ガオファーは黄金のフィールドを展開しガオーマシンが中に突入し合体が始まる
ガオファーとドリルガオーが連結する
ライナーガオーは折り畳まれていたボディを伸ばし７００系新幹線の試験車のような形状になる
ガオファーの腕部は外れ背中と連結する
ライナーガオーはガオファーと合体し
ステルスガオーが背に合体する
ガオファーの肩に装備されていたパーツが胸部に移動する

そしてステルスガオーから腕が付けられ兜が装備される

「ガオ！ファイ！ガァァア！！！」

『座標軸固定ディバイディングドライバー射出！』

代わりにＡＩとなった俺がディバイディングドライバーを出す

そして腕と連結する

「ディバイディングドライバァァア！！」

ディバイディングドライバーにパワーを充填させシールドに突っ込む

ババババババン！！！シュ～！！

空間が捻じ曲がりシールドに穴を開ける

そこにいたＩＳは全身装甲

しかも・・・

『いけませんね～そんな攻撃私には効きませんよ？ワドマ～ゼル？』

太くがっしりとした腕と足

色は白がベース

全身装甲のＩＳ

『？？いけませんね～邪魔しないでいただきたいんですかね～』

「問答無用だ！勝負だ！！」

地面に降り翼を元の位置に戻す

「一夏！鈴を連れて避難しろ！！」

「せ、聖心先輩！？」

「急げ！！」

「わ、わかりました！！」

一夏は焦りながら鈴を連れて避難する

「いくぞ！！」

『負けませんね～』

「『おお～！！』」

2機は一気に接近し組合になる

ギムレットが押しているのかガオファイガーの脚部が更に地面にめり込む

「こいつ！」

『ご安心くださいすぐに楽になりますよ！』

「そいつは有難いぜ！！」

凱はギムレットの手を握りつぶす

『ヌワァ！？』

追い討ちをかけるようにドリルニーを腹にかます

『ドワァ～！？』

吹き飛ぶギムレット

「ガオファイガーのエヴォリュアル・ウルテク・パワーを見せてやるぜ！」

するとガオファイガーの腕からギムレットのパーツがギムレットの

元に戻り
新たな腕を作る

『はっははは!!このギムレット・アンプルーレはパーツを組み
替えることにより
２３種類の特殊能力を使うことが出来るその１!』

右腕に光が灯る

『エクスプロジオンレオン!!』
「プロテクトウォォル!!」

エネルギー状のファントムリングを展開し防御フィールドを作り
撃ってきたエネルギーを増幅し星の形にし跳ね返す

『ぐわぁ!!』
「ふん!!」
『まだまだ!!』

粉粉になったはずだがまた元通りなり
肩には新しい武器が付いている

『その２!コロッサルコンビュステイブル!!』
「ブロウクン!!」

ファントムリングを展開し腕を構え回転させる

「ファントォォム!!」

ロケットパンチのように腕を打ち出す

がギムレットは腹に穴を開け受け流す

『は～はは！？なぁ～～～』

がファントムリングがそのまま残りボディを粉砕する

「ゴルディマーグ！！」

『おう！待ちくたびれたぜ！！』

ゴルディがガオファイガーの隣に現れる

『ゴルディオンハンマァァア！！発動！承認！！
ゴルディオンハンマー！！セーフティデバイス！リリーブ！！』

俺が長官と命をやる事に

「システム！チェ～ンジ！！」

ゴルディは上昇し上半身はハンマーとなり
下半身は折り畳まれ大きな手となった
ガオファイガーは右腕を外し

「ハンマーコネクト！！」

巨大な腕を着けハンマーを掴む

「ゴルディオン！！ハンマァァァア！！！」

ハンマーは金色に輝きガオファイガーも黄金となった

『凱、コアは顔の一つ目みたいな所だ』
「了解！」

ギムレットは戦車型に変形した

『特殊能力その１９　シュプスタンスエクスキュゼモワ！！』

ボディの大半からなる二基のミサイルを放ってくる
ゴルディオンハンマーの前では無力
あっさりと光にされてしまった

『ハイデギョギョ！？』
「ふん！」

凱は光の杭を引き抜き上昇しギムレットに突き刺し

「ハンマーヘル！！」
『ドォォォ！！！！！！！』

ゴルディオンハンマーで打ち付ける

「ハンマーヘブン！！ぬわぁ～！！」

ゴルディの腕から杭を抜き取るためのパーツが出て
それを使い杭を抜きコアを回収し左手で握る

「光になれぇぇぇ！！！！！！！！」

そのままボディにゴルディオンハンマーを打ち付け
相手のエネルギーを０にし

相手を光に変換しＩＳを待機に強制的に移行させた
これがガオガイガー及びガオファイガー最強のツール
ゴルディオンハンマーの威力である
が今回のゴルディオンハンマーの出力はたったの
１２％であったのだ
ちなみにゴルディオンハンマーをフルで使おうとすれば
ＩＳのシステム全てを完全に粉砕
使用不能となってしまうほどの威力を誇る

『凱お疲れさん」
「（久々に戦って良い汗かいてぜ）」
『それって本当に良い汗なのか？』
『それには俺も同感だぜゴルディ』
「（なんか腹減ったな）」
『『凱はＡＩだろうが！！！！』』
「（そうだが気分的に牛丼が食いたい）」
『はあ分かったよ後で作るから・・・』
「（サンキュ！相棒！！！）」
『そればっかり』

主人公設定

獅子王（ししおう）　聖心（せいしん）

年齢　１８歳　（転生前）→転生後　１８歳
ＩＳ適正　ＧＧＧ
容姿　目の色が黒の獅子王　凱
　茶色の長髪、いつもは後ろで束ねポニーテールのような感じにしている

名は親が本当は清らかな心で清心としたかったらしいが間違えこうなった
彼女とのデート中に彼女が車に引かれそうになるが思いっきり突き飛ばして助けるが
その代償として自らの命が消える
最後に深くて熱いキスをして俺は息絶えた
そして気が付くと土下座している神と出会いそこで自分が神の過ちによって死亡したことを知り
神の手によってＩＳ世界に転生を果たす
そして特典としてＩＳ『ガオガイガー』を手に入れる
ＡＩとして勇者　『獅子王　凱』が搭載している
ガオガイガー、ガオファイガー、ジェネシックガオガイガーを装着可能が
ジェネシックは未だ未使用

聖心のＩＳ『ガオガイガー』のＡＩ
元は『勇者王　ガオガイガー』の獅子王　凱である

Ｇストーンの力を使い実体化が可能
自室ではよく実体化し牛丼をよく食べる
ＩＳの整備を担当が極稀に忘れてしまう
聖心と意識の交代が可能
その場合、凱が聖心の体を制御下に置き聖心はＡＩとなりサポートをする

・・・一夏・・・セシリア・・・何の用だ・・・

『・・・凱、もういいか？』
「ああ、じゃあ交代するぞ」

凱は目を閉じた、そして目の色は本来の色、黒へと戻った
凱は本来のＡＩに戻った
俺は目を開きガオファイガーを解除した
そして髪止めをだし髪をで束ねポニーテールのような感じにする

「獅子王、そのＩＳの搭乗者はどうした？」

織斑先生と山田先生がやってきた

「いえ、こいつは無人機です」
「何？」
「先程の声はおそらくＡＩでしょう
ゴルディオンハンマーの一撃でＡＩだけが壊れたみたいです」
「そうか・・・」
「それにしても凄まじいまでの光と威力でしたね・・・
ゴルディオン・・・なんでしたっけ？」

思わず転けかける俺

「ゴルディオンハンマーです・・・」
「確かにな・・・ＩＳが待機状態にしコアを引き抜くとは・・・」
「とりあえずこのコアはお渡しします」

俺は織斑先生にコアを渡す

「では俺はこれで少し疲れましたので・・・」
「では部屋で休め、がお前がＩＳを展開する前と展開中は人が変わったようだったが
あれはなんだ?お前は二重人格なのか?」

・・・マジか・・・

「・・・いつかお話しします」

俺はそのまま部屋に戻った
ドアを開けて中に入るとセシリアと一夏がいた

「おい何やってる?不法侵入とは良い度胸だな」
「ちょ、ちょっと!待ってください先輩!!」「お、お待ちください!聖心さん!!」

ふたりは誤解を解くようにあせる

「俺はただあの時先輩が人が変わったみたいだったから話が聞きたいだけで!!」
「わ、私もです!!」

・・・鋭いな・・・

「・・・何の事だ・・・さっぱり解らんな・・・」

ドカッと椅子に腰かける

「嘘を言わないでください、あの時の聖心さんは明らかに何時もと

は違います」
「俺もそう思います・・・」

まっすぐとした目で俺を見る二人

『心言ってもいいじゃないか？』
「面倒な事になるぞ、凱？」
「「へ？」」
『それでも立ち向かうのが』
「『勇者・・・だろう？』」
「解ったよ・・・凱出てきてくれ」

俺が言うと付けていたガオガイガーから凱が出てくる

「せ、先輩！！この人は！！？」
「俺の相棒の、獅子王　凱だ」
「よろしく、一夏にセシリアだな？」
「は、はい」
「こ、こんにちわ・・・」
「で・・・凱さんて・・・先輩の・・・お兄さんですか？」
「まあ・・・そんなところかな？俺は昔事故にあってな
ある科学者のお陰でこのＩＳにＡＩとしているんだまあ必要に応じて心と入れ替わることができるけどな」
「ええ！？」
「じゃ、じゃあ先程の戦いは！？」
「そ、凱と俺と入れ替わって凱が俺の体を制御下に置き俺はＡＩとなってサポートしてたんだ」

一夏とセシリアは以前唖然している

「まあこの事は内緒で頼む」
「「わ、解りました・・・」」

そして二人は去って行った

「・・・心大丈夫か?」

俺は椅子に体を大きく沈めていた

「・・・ああ・・・」
「元々実体であった心が意識を電子データに分解し再構築するのは精神的には大きくダメージを与える・・・やはり俺が我が儘さえ言わなければ・・・」

凱は肩を大きく落とす

「気にするなよ・・・俺は後悔してない・・・凱・・・相棒なんだから俺にもっと我が儘言っていいんだぜ?」
「心・・・」
「さあ・・・約束だから特製の牛丼作るか・・・」

勇者アンケート

「どうもこの作品の主人公らしきポジションの獅子王　聖心です」

「どうも初めましての方もお久しぶりの方も心の相棒の獅子王　凱だ」

「さあ今回は作者であるアルトアイゼン・リーゼからメモを預かっております」

「いきなりだな」

「まあいつもの事らしいし、え～っと・・・
『今回は一夏をはじめとする専用機持ちに勇者を付けようと思っているのですが
誰に誰を付けようかっという事です、以前簪を勇者にっという感想を頂きましてどうせなら
勇者いるだけ勇者になってもらおうと思いまして』・・・だってさ凱」

「つまり、一夏達強化のために氷龍、炎龍、雷龍、風龍、光龍、闇龍、ボルフォッグ、マイクを
付けるって事か？」

「そういう事、因みに氷龍、炎龍、雷龍、風龍、光龍、闇龍、雷龍と風龍、光龍と闇龍は一緒にするらしいついでに
Ｊも候補に入れるらしいってかＪって勇者だったけ？」

「まあ一緒にするって事はシンメトリカルドッキングするって事で

いいのか？
別々でもいい気がするけど・・・」

「俺はそう思うから問題ないと思うぞ、凱、ではここで例えを紹介します」

一夏　マイク　1票

箒　氷龍と炎龍

鈴　風龍と雷龍　1票

ラウラ　ボルフォッグ　1票

1人3票までです

「「では皆様のご参加お待ちしています」」

勇者王対勇者王

ある日の放課後
一夏とセシリアだけではなく箒、鈴、織斑先生、山田先生に話した、
そしたら

「お前達はどちらが強いのだ？」

っと織斑先生に言われたため凱と模擬戦をすることになった

「なんか大変な事になってきたな・・・凱・・・」

既に実体化している凱に話しかける

「確かに・・・」

多少呆れながらもＩＤアーマーを装備した凱が言う・・・

『何をしている！さっさと展開せんか！』

先生の怒涛の声が響く

「「はあ・・・」」

同時に息を吐く
やっぱり相棒が凱でよかった

「俺はギャレオンと戦うがいいか？」
「いいよ、ガオファイガーとガオガイガーは強化したから性能は互

角だし」

お互いにファイティングポーズをとる

「ファンオムガオー！！」「ギャレォォォン！！！」

ファンオムガオーとギャレォンが現れる

「「フュージョン！！」」

凱はジャンプし体を丸めるそれをギャレオンが取り込み、変形を開始
ギャレオンの頭部は胸部になり、そこから人型の頭部が現れる、前
足は手となり
後ろ足は人間のように真っ直ぐとなった、そして頭部のGストーン
が光る

「ガイガー！！」

俺はGストーンの力を使いファントムガオーのハッチからファント
ムガオーと融合した
ファントムガオーの形状は変化し人型となった

「ガオファー！！」

そして・・・

「「ファイナルフュージョン！！」」

ガオファーは黄金のフィールドを展開しガオーマシンが中に突入し

合体が始まる
ガオファーとドリルガオーが連結する
ライナーガオーは折り畳まれていたボディを伸ばし
７００系新幹線の試験車のような形状になる
ガオファーの腕部は外れ背中と連結する
ライナーガオーはガオファーと合体し
ステルスガオーが背に合体する
ガオファーの肩に装備されていたパーツが胸部に移動する
そしてステルスガオーから腕が付けられ兜が装備される

「ガオ！ファイ！ガァァア！！！」

腰のスラスターからＧＳライドのスモークを回転しながら噴出する
その中にドリルガオー、ステルスガオー、ライナーガオーが入ってくる
腰を回転させドリルガオーと連結する、腕を背に移動させ肩からライナーガオーが入る
そして背にステルスガオーがドッキングした、ギャレオンには鬣が付けられステルスガオーから腕をドッキングし
兜が頭部に着く

「ガオ！ガイ！ガァァア！！！」

向き合う勇者王

「「・・・」」

沈黙と停止・・・
俺はファントムリングを展開し腕を構える

凱は腕を振り上げファントムリングに通す

「「ブロウクンファントム!!」」

ロケットパンチのように腕を打ち出す双方はぶつかり合い激しい衝撃波を起こす
がお互いのファントムリングが砕け散り腕は戻ってくる
俺と凱が走りながら腕をドッキングさせる

「うぉお!!」「おぉお!!」

双方のパンチが頬にヒットし兜の口の部分が少しひび割れる
刹那、お互いに膝のドリルで攻撃するがまったく同じタイミングでドリル同士がぶつかり合う

「これならどうだ!電撃拘束!プラスマホールド!!」

左手からプロテクトシェード展開の際に発生する反発的防御フィールドを反転させ
ガオガイガーを拘束しそのまま投げつける
そして倒れた隙をつき

「ブロウクンマグナム!!」

攻撃を仕掛けるが空中に逃げられる
そこで凱は予想外の行動にでた、右腕を赤く光らせ、左腕を黄色く光らせている

「ヘル・アンド・ヘヴン!?空中で!?」

が凱の狙いはそこでは無かった狙いは俺の同様を誘う事
そのためにヘル・アンド・ヘブンを囮に使ったのだ、その一瞬の隙
をつき
ブロウクンエネルギーが充満した腕で殴りつけガオファイガーを倒す
そして

「ヘル・アンド・ヘヴン！！」

その隙を使いヘル・アンド・ヘヴンを発動

「ならこちらも！ヘル・アンド・ヘヴン！！」

お互いにヘル・アンド・ヘヴン発動

「「ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフォ・・・ムゥン！！」」

お互いの体が新緑の色に変化しファイナルフュージョン時に発生さ
せるＥＭトルネードを利用して
目標を拘束しようとするが既に双方が突撃しているので意味を成さ
なかった
そして双方の拳がぶつかり地面が抉れエネルギーが溢れ出す

「「勝利するのは・・・勇気ある者だぁぁぁあ！！！！！！！！」」

更にエネルギーが上昇していくが、ガオガイガーの腕にヒビが入り
始める
行ける！！
が・・・ヒビが入ったままの腕はガオファイガーの腕を粉々にしガ
オファーを捕られた
腕は奥まで入り込む凱はそのまま腕を引き抜いた

ガオファイガーは大爆発を起こす
爆発がはれるとそこには仰向けになった凱と聖心がいた

「ったくあぶね～あぶね～あとちょいで負けるとこだった・・・」
「まさかあそこでドリルニーを食らうとは思わなかったよ・・・」

ヘル・アンド・ヘヴンが奥まで入り込んだ時にドリルニーでの零距離攻撃が成功し
お互いのエネルギーを０とした

獅子王　聖心ＶＳ獅子王　凱

聖心　通算　４９勝　５０敗　１引き分け

凱　通算　５０勝　４９敗　１引き分け

千冬の疑問

私の名前は織斑　千冬、このＩＳ学園で教師をやっている身だ
ＩＳ学園には今私の弟である一夏と『ガオガイガー』という名の全身装甲のＩＳを操るもう一人の男子
獅子王　聖心がいる、そしてＩＳのＡＩであり聖心の兄である獅子王　凱
この二人が今の私の悩みの種だ、私はパソコンで今日の夕方行った獅子王　聖心がと獅子王　凱の模擬戦が映し出されている
・・・

『うぉぉお！！』『おぉぉお！！』

双方のパンチが頬にヒットし兜の口の部分が少しひび割れる
・・・この時点でこの２機のパワーが良く分かる・・・
いくらクリンヒットしたと言ってもヒビはなかなか入らない、お互いに異常な固さを持っているからだ

『ヘル・アンド・ヘヴン！！』『ならこちらも！ヘル・アンド・ヘヴン！！』

『『ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフォ・・・ムゥン！！』』

此所だ、私の一番の疑問は
そして双方の拳がぶつかり地面が抉れエネルギーが溢れ出す

この片手ずつが違う光を放ちそれが反発するのを無理矢理に合わせ、そして

緑の竜巻を発生させ、スラスターを一気に開き突撃するこの技・・・
従来のＩＳでは絶対に有り得ない威力だ、いやあってはならない・・・
・
獅子王がアンノウンのＩＳに使った武装『ゴルディオンハンマー』
とまではいかないが・・・
いやある意味ではアレより質が悪い、これを見る限りは『ゴルディ
オンハンマー』はこれの技の代用
として開発されたのだろう、凱が聖心にこの技を命中させた時、大
きく腕を敵のボディに食い込ませている
あのまま行けばおそらくはコアを抜き取るため動作だろう・・・
その前に聖心が零攻撃を行ったために腕を引き抜くしかなかったの
だろう
おしてこの腕の光、これが気になる、あの絶大過ぎる攻撃力を実現
するこの光・・・あまり気は進まんが・・・
私は携帯を取り出し電話を掛ける
・・・暫くし・・・

『はいは～い！皆のアイドル！篠ノ之　束だよぉ～！！お久しぶり
！ち～ちゃん！』

そう電話したのはＩＳの生みの親、篠ノ之　束だ

「相変わらず無駄に元気なものだな、それとその呼び方はやめろ」
『もう！ち～ちゃんったら照れちゃって♪』
「・・・いい加減にしろ・・・私はお巫山戯がしたくて電話したの
でない」
『解ってるってち～ちゃんが電話してくるって事はなにかあるの？』
「・・・まずはこれを見てくれ」

私は束に獅子王達の模擬戦とセシリアとの模擬戦の映像を見せた

アンノウンのＩＳはこいつの仕業だろう、よって見せん

『・・・すごいね～！これ！天才の束さんでもこんなの出来ないよ』
「・・・それで束、私が気になるのはあの技のモーションの入る前の腕の光だ」
『・・ああこれね』

私の手元のパソコンでもその映像が流れている

『う～ん多分だけど、この模擬戦の前の模擬戦で使ってたこの『ブロウクンマグナム』と『プロテクトシェード』っての利用してんだと思うよ』
「どういう事だ？」
『見た感じじゃあこの技は単純に攻撃力を上げるだけだと自信の体が持たないと思う
だから右腕は『ブロウクンマグナム』の攻撃エネルギー、左腕は『プロテクトシェード』の
防御エネルギーを使ってると思うの、このエネルギーを全身に纏っての威力が実現できる
でも幾ら束さんでも現状は無理だよ』
「・・・そうかではな」

ピッ・・・
・・・攻撃と防御を同時に高める・・・それであれほどの攻撃力が実現出来るのか・・・
とにかく獅子王達はこれから大変な・・・

転校生

「今日は転校生がいます！しかも2人も！」

副担任の山田先生が言い放つと女子たちは騒ぎ始めた、そんな中に転校生が入ってきた

「シャルル・デュノアです、フランスから来ました　宜しくお願いします」

「「「「きゃあぁぁぁぁあ！！！！！」」」」

女子の声が教室中に響く

「男子！　三人目の男子！」

「獅子王さんとは違う魅力！！」

「なんかこう守ってあげたくなるような！」

そして次の人

「挨拶しろラウラ」

「はい教官」

「ここでは織斑先生と呼べ」

「了解しましたラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「「「「・・・」」」」

「え～っと・・・以上ですか？」

「以上だ」

俺は先程の事でデジャブを感じながら彼女と目が合う、そして彼女は近づいてきて

俺に平手打ちを食らわせた

「・・・私は認めんぞ！貴様があの人の弟など、認めるものか！」
「おい！先輩に何すんだよ！！」
「貴方！！聖心さんに何をなさるのですか！！？」

一夏とセシリアは激しく講義する、一夏は憧れの存在であり師匠である聖心に対する行為への怒り、セシリアは好意を寄せる人への行為が許せない

「え？・・・お前が織斑　一夏では・・・」
「俺は獅子王　聖心だ、一夏はそっちだ」

親指で一夏を指差す
ラウラは顔を少し赤くし一夏に向かい平手打ちを食らわせた

「わ、私はお前があの人の弟だという事は認めんぞ！／／／」
「だったら先輩叩くんじゃねぇ！！」
「そうですわ！！」
「う、煩い！！日本人は何故顔が似ているのだ！！もっと違いが解る顔にならんか！！
分かりにくい！！」
「どんだけ理不尽なんだよ！！？おい！！」
「ではＨＲを終わる各人着替えて第二アリーナに集合
２組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う解散！」

千冬が声を上げてＨＲが終った、千冬と山田先生は去って行った

「獅子王、織斑、お前達デュノアの世話をしろ」
「えっと・・・僕はシャルル・デュノアです宜しく」

「ああよろしくが自己紹介は後だ、早く行かんと・・・」
「ダメです！先輩！！廊下は既に！！」

一夏の言う通り廊下には大量の女子で埋め尽くされていた

「・・・ど、どうしょう・・・」
「先輩、このままだったら俺達、千冬姉の出席簿の餌食になっちゃいますよ・・・」
「任せろ、ディメンジョン・プライヤーズ！！」

ガオガイガーの腕を部分展開しプライヤーズを呼び出す
３体の小型ロボ（ＤＰ－Ｃ１、ＤＰ－Ｒ２、ＤＰ－Ｌ３）が巨大なプライヤー（ペンチ）型に合体変形する

「ツールコネクト！！」

腕と連結しペンチが開く

「シャルル！一夏！俺に掴まれ！！」
「はい！！」「え！？は、はい！！」

一夏は俺の腕に掴まり、シャルルは俺の腰に抱きつく形になった
本来のプライヤーズは異常が発生した空間をねじ切り、宇宙空間に排除するため空間修復ツールが俺と凱の改良という名の魔改造によって瞬時空間移動が可能となった

「おぉぉおおお！！！！！」

次第に俺の周りの空間が捻れ聖心達は消えた

「「「「「ええぇぇえええ！！！！！？？？？」」」」」

教室には女子の声が響いた
そして男子更衣室には空間の捻れが起こりそこに聖心に抱きついたシャルルと一夏が現れた

「ふう、さあ着替えよう」
「やっぱすごいっす！！先輩は！！流石は師匠！！！」
「凄い凄い！！聖心さん！！凄すぎです！！」

目をキラキラさせながら俺を見る二人

「ははは、さっさと着替えるぞ出席簿の餌食になるぞ」
「「はい！！」」

転校生（後書き）

アンケート途中結果

一夏　候補　氷龍、炎龍　Ｊ

箒　候補　ボルフォッグ　氷龍、炎龍

鈴　候補　風龍、雷龍

シャル　候補　光龍、闇龍　ボルフォッグ　マイクサウンダース１３世

ラウラ　候補　ボルフォッグ　Ｊ

簪　候補　マイクサウンダース１３世

と言った状況です

和解

「本日から格闘、射撃実戦訓練を開始する」

織斑先生が一言、あの後スーツに着替えた後少し急ぎ足がぎり間に合わなかった
その影響かいざ知らず、セシリアと鈴は出席簿の一撃をもらった

「ではさっそく戦闘実演をやってもらおう、凰！オルコット！手本を見せてみろ」

二人は小言で文句を言いながら織斑先生の近くに向かう

「嫌そうな顔をするな、アイツらに良い所を見せられるぞ（ボソッ）」

織斑先生のつぶやきで二人は一気に奮起した

『流石先生だな、巧い心理作戦だ』
「（なんの話だよ・・）」

そして・・・なぜか落ちてきた山田先生に一夏は潰され、一夏のスキル『ラッキースケベ』が発動鈴は怒り一夏に対して攻撃するも山田先生が見事といえる射撃で一夏を助けた
そして二人は山田先生と戦う事になり惨敗した、敗因は簡単、お互い動きを合わせようとはせず、自分勝手な行動をしたためだ、そしてセシリアは少し凹んでいた
後で慰めてやろう
そして織斑先生の指示で俺達専用機がクラスのグループのリーダー

となり
そのリーダーに教わる
生徒が８名、因み俺は先生にラウラをサポートとしろと言われラウラのグループに入った
が一つ問題がある、先程のＨＲでのラウラの行動で生徒はラウラを警戒するだろう
まあそのために俺を組み込んだのだろう、まあまずは挨拶だ

「改めて宜しくな、獅子王　聖心だ」
「・・・」

ラウラはそっぽを向いている、どこか間違えたか？

「そ、その・・・先程は済まなかった・・・」

ラウラを顔を完全に俺に向けず謝罪した

『何だいい子じゃないか』
「別にいいさ、気にしてないとにかく宜しくなラウラ・ボーデヴィッヒさんよ」
「私の事はラウラで良い」
「俺も聖心で構わん、さあ始めよう」

俺達のグループが使用するのは打鉄、俺はサポートしてやる事になった
それにラウラの教え方が巧い事に感心している

「理論を混えながら体感的な事も付け加える、織斑先生に似た教え方だな、良い教え方だ」

俺が感心するとその言葉に反応したのか俺の方にラウラがダッシュできた

「当然だ！私は心から教官を尊敬しているのだ！！」
「それだけで教え方まで同じとは・・・恐れ入る・・・」
「当然だ！・・・そう言えば聖心、お前も専用機持ちだったな」
「ああ見るか？」
「ああ」

俺はガオガイガーを合体状態のまま呼び出した、ガオガイガーになると正直目線が高くなる

「「「「「おお！！」」」」」

女子は感嘆の声を上げる

「やっぱりカッコいいね！獅子王さんのＩＳ！」
「うんうん！胸のライオンもカッコいいし！」
「でも顔が見えないのが残念・・・」

思い思いの事を言う女子達、ラウラはぜひとも戦いたいという目をしている

「ラウラ、今度模擬戦をやらないか？」
「いいのか！？」
「ああ、お互いの実力を知るのもいいだろうからな、まあ今は指導に専念しよう、織斑先生に怒られる」
「う、うむ、そうだな」

流石に幾ら織斑先生と言っても怒られるのは嫌らしいな

和解（後書き）

ラウラと友好的な関係を持ちました

訓練とラウラ襲撃未遂？

「ねえねえ聞いた聞いた？」
「聞いた聞いた！」
「何の話？いい話？」
「最上級にいい話！！」
「今月の学年別トーナメントで優勝したら・・・」
「したら？」
「なんと！一夏君か！獅子王さんと付き合えるんだって！」
「俺達がどうかしたか？」
「「「「キャ～！！！！！！！！！！！！！」」」」
「何だ・・・失礼な・・・」

なにやら騒がしいな・・・俺と一夏は教室が出ようとした時なにやら女子が騒いだ
が俺達はそんな事に構わずに俺達は訓練のためにアリーナに向かった

「さて一夏、訓練と行こう」
「はい！師匠！」
「・・・師匠はやめろ・・・」
「え？獅子王さんって一夏の師匠なんですか？」

シャルルは可愛く首を傾げる

「ああってか一方的に師匠って言われるだけだけどな」
「へぇ～」

そして俺と一夏は訓練を始める事にした

「では今回は集中力アップを目的とした訓練だ」
「しゅ、集中力？」
「うむ、今回は銃を使うが、一夏の白式には銃はない、という事で俺の銃を貸そう
（凱、メルティングガンとフリージングガンを出してくれ）」
『了解』

すると俺の手にメルティングガンとフリージングガンが現れる

「おお！！」
「赤いのがメルティングガン、青いのがフリージングガンだどっちか選べ
もうお前でも使えるようにしてある」
「じゃ、じゃあメルティングガンで！」

一夏は喜び勇んでメルティングガンを握った、構え方などを教えて
一夏は的に目掛けてトリガーを引いた
バシュン！！メルティングガンは超高熱エネルギーの弾丸を発射し的の少し端を捉える

「ん～難い・・・」
「一夏、もう少し肩の力を抜いて」
「ん？こうか？」

シャルルが手取り足取り銃の撃ち方をレクチャーしまともに出来た所で一発一発に自らの意識を移すように
打つように指示し集中力の向上を図る
すると急にアリーナ内が騒がしくなり視線が集まっている方に視線を移す、そこには先程友人となったＩＳを展開したラウラが居た

「・・・私と戦え」
「ふざけんな、俺は今訓練してんだ、てかやる意味がない」
「貴様に無くとも私にはあるのだ」

ラウラは鋭い視線を一夏に向ける、俺はため息を吐きプライヤーの瞬間移動を応用した高速移動を使いラウラの真横に立つ

「よおラウラ、先程ぶり」
「!?・・・あ、ああ先程ぶりだな、聖心・・・」
「ここで戦うのもいいが、ここでは他の生徒がいて邪魔になって本気で戦えんぞ?」
それに織斑先生に面倒がかかるぞ?」
「そ、それはいかんな・・・」
「では、次の機会にな?・・それにしても・・・」
「な、なんだ・・・?」

俺はラウラのＩＳを見る、恥ずかしそうにラウラは少しうろたえる

「カッコいいな、ラウラのＩＳ」
「そ、そうか?」

黒がベースになっておりとてもクールでカッコいい
俺も黒が好きだ、黒が好きになったのはジェネシックの影響だがな
最高じゃね!?ジェネシック!!「それは最強の破壊神、それは勇気の究極なる姿」

「クールで気高く、雄々しくて、俺は好きな方だな、メインカラーも俺好みだ」
「・・・!!そ、そうか!私のシュヴァルツェア・レーゲンはクールで気高く、雄々しいか!!」

自分のＩＳを称賛されて嬉しいようだ

「じゃあ今回は引いてくれ、今度は俺が邪魔にならないように一夏と戦える舞台を用意しよう」

「そ、そうか、では・・・織斑　一夏、今回は友人の聖心に免じて今回は見逃してやる」

そう言ってラウラは去って行った

この後俺は他のメンバーに質問攻めにされセシリアと休日に買い物に付き合わされるハメになった

俺は訓練を終えると整備室に向かった、友人との約束を果たすためだ

簪のＩＳ（前書き）

今回、とりあえず皆の勇者が決定！
今回は簪です

簪のＩＳ

俺は整備室で簪のＩＳの仕上げにかかっている
簪がガオガイガーの整備を手伝ってくれたお礼だ、簪が凱見たときは目をキラキラさせてたな
俺は考えている事がある

「簪、提案があるだけどいいか？」
「何？」
「ＩＳに相棒が欲しくないか？」
「相棒？」

簪は首を傾げる・・・可愛いな・・・

「ああ、俺と凱みたいな感じで」
「・・・いいかも・・・（キラキラ）」
「う～ん・・・誰がいいかな・・・」
『イッツミ～！！！』

するとホログラム状態でコミカルなコスモロボ形態のマイク・サウンダース１３世が出てきた

「マイク！勝手に出て来るなよ！」
「Ｏｈ～それはｓｏｒｒｙね～でもマイクは簪とｆｒｉｅｎｄになりたいもんね！」
「はぁ～・・・すまんな簪・・・驚かせ・・・て？」

簪はマイクを見て嬉しいそうだ

「（キラキラキラキラキラキラキラキラ）・・・私、簪！宜しく・・・！マイク・・・！」

「Ｏｈ！マイクだもんね～！！これからマイク達はｆｒｉｅｎｄだもんね！！」

「・・・！！！！！」

マイクは簪の肩の上に移動し戯れている

「・・・まあ簪のパートナーはマイクでいいか？」

「うん・・・！！！」

「じゃあマイク、ＩＳにＧＯ！」

「ＯＫだもんね～！！」

マイクはバリバリーンを操作し簪のＩＳに飛び込んだ

そしてＩＳはＧストーンの光を放ち始めた

「簪、マイクが待ってる」

「・・・うん！」

簪はＩＳに手を伸ばし触れた、そして簪も暖かなＧストーンが放つ命の光に包まれた

すると現れたのは打鉄弐式の形状を残しつつ肩にはサウンドスピーカーのようなパーツが追加され

腰にはエレキギターとミュージックキーボードが融合した『ギラギラーンＶＶ（ダブルブィ）』

両膝部分にはマイクロフォン型サウンドツール『ドカドカーンＶ』

言うなれば打鉄弐式とマイクの融合した簪がそこにいた

「これが・・・私・・・」

「すごいな・・・予測以上のエネルギー総数だ」

『あったりまえだっぜ！マイクの勇気に限界なんてないっぜ！！』
「の割には総数はガオガイガーどころか超龍神にさえ届かないな」
『うっぐ！そ、それはガッツで補えば問題ないっぜ！！』
「言ってる事がめちゃくちゃにも程があるぞ」
『・・・返す言葉が・・・ないっぜ・・・と、とにかく！これで』
「ああ、簪！」
「な、なに・・・！？」

俺は手を差し出した

「ようこそ！勇者の世界へ！！」
「・・・うん！！！」

簪は俺の手を強く握った、この世界での勇者第１号だ

「簪、今度の学年トーナメントでパートナーをお願いできるか？」
「も、もちろん！！」
『それでこそ勇者だっぜ！！』

俺は簪とタッグを組んだ

始まる学年トーナメント　聖心＆簪ＶＳセシリア＆鈴

さてさてやってきました学年トーナメント、俺と簪の最初の相手はセシリアと鈴だ
候補生同士がペアか相手にとって不足なしっても俺も日本の代表候補生の簪がパートナーだけどな
俺達は今俺達の出番が来るのを待っているが、簪は緊張しているようだ、呼吸が荒い

「大丈夫か？簪？」
「だ、大丈夫・・・心配しないで・・・」
『Ｏｈ！簪、緊張はいけないもんね～落ち着くもんね～』

マイクも相棒として役目を果たそうとしている

「・・・有難う・・・」
「・・・どうやら俺達の出番のようだ、さあ楽しもう」
「・・・うん・・・！」

俺と簪はアリーナに足を進めたそこには既にセシリアと鈴がＩＳを展開して待っていた
俺達も展開する事にした
簪は暖かなＧストーンが放つ命の光に包まれ、打鉄弐式の新たな姿『サウンダース・ネクスト・オーバー』となった
俺もガオガイガーを展開する

「ガオ！ガイ！ガァァア！！！」

俺達はスラスターを吹かし浮き上がりセシリアと鈴と向かい合った

そして試合スタート

まずは鈴が双天牙月を構え突撃してくる、先制攻撃という事だろうが、簪は肩にマウントされたGストーンのエネルギーを収束させたブレード
『G・ガーディアン・ブレード』を抜き放ち鈴と鍔迫り合いになりながら上昇していく
俺は右腕を高速で回転させながらセシリアに向かう
セシリアは急激に後退しライフルで攻撃してくる、右腕で弾を弾きながら接近する

「ブロウクン！マグナァム！！」

超至近距離よりブロウクンマグナムを放つが上空から降下してきた鈴によって跳ね返される

「ほう・・・よく跳ね返せたな」

上空から簪が降下してくる

「ごめん・・・取り逃した・・・」
「構わないさ、簪、にしても強くなったな、セシリア」
「ええ、聖心さんに勝ちたい一心で訓練いたしましたわ」
「さあ行こうか！セシリア！簪、鈴は任せる」
「解った・・・」

俺はセシリアに向かった、セシリアはインターセプターを展開し接近戦を行う
腕とインターセプターが交差し火花を散らす
がセシリアは力負けし地上に落ちてしまう、その隙を付き

「凱！ガトリングドライバー！射出！」
『了解！座標軸固定ガトリングドライバー射出！』
ガトリングドライバーを腕と連結する
「ガトリングドライバァァア！！」
ガトリンググドライバーにパワーを充填させセシリアに向ける
ババババババン！！！シュ～！！
すると空間が捻じ曲がり、セシリアの周辺の空間が牢獄のようにセシリアを閉じ込め
エネルギーを削りセシリアのＩＳのエネルギーが０になった
それと同時にセシリアを閉じ込めていた空間が元に戻りセシリアは開放される
俺はセシリアを優しく受け止める、俺はガオガイガーの兜の顔の部分が見えるようにして微笑む
「大丈夫か？」
「あ／／／／／／は、はい・・・／／／／／／／」
「じゃあまた後でな」
俺はセシリアを降ろし飛んだ
簪サイド
私は今マイクと一緒に相手と戦っている、私は握っている『Ｇ・ガーディアン・ブレード』
を強く握った、この剣は勇気と私の感情によって出力が大きく左右する

そして今『G・ガーディアン・ブレード』は大きくGストーンの輝きを放っている
これは私の感情が出力を大きくしているから
私が今持っている感情は、心さんの相棒になれた喜び　これだけ
マイクによると＋の感情だと出力は大きくなりーでは小さくなるらしいのだ
つまり怒り、憎しみ、悲しみ、それらの感情に身を任せるとGストーンは力を発揮するのを拒んでしまう
それが勇者の条件、怒り、憎しみ、悲しみ、に身を任せてはいけないそれとGストーンが認める事
これが勇者のための条件、私は更に喜びに勇気を混ぜる事で出力を更に上げる

「ま、また光が大きくなった!?」
『簪!すげぇっぜ!まさかこれほどまでGストーンが簪を認めるなんて!驚きだっぜ!!』
「・・・心さん・・・見てて・・・」

更に輝きが増しブレードの切れ味と破壊力が増していく
一気にGSスラスターを開いて鈴に接近し斬りかかる

「!?は、速い!くっ!!」

双天牙月で防御するがあまりの切れ味と破壊力に双天牙月は使用不能にされ
鈴は戸惑ったがその隙が仇となり『G・ガーディアン・ブレード』の一太刀がクリンヒットし
鈴のエネルギーを0にした

「やった・・・」

『簪！最高だっぜ！』

「・・・ありがと・・・マイク・・・／／／」

勇者対ゾンダー？

さて俺達はＩＳを解除し試合を見ている、今現在の試合は一夏＆シャルル対ラウラ＆箒
何の因果が有ってあの組み合わせになったんだ？またあの唐変木のせいか？
それにしても・・・コンビネーションがいいな、一夏とシャルル
抜群のコンビーションでラウラと箒を追い詰める、ラウラのＩＳの厄介な武装『ＡＩＣ』
に箒を倒したシャルルが加わり、一方が拘束されてももう一方が攻撃し救出する
・・・そろそろ決まるか？
がラウラは言葉にならない絶叫を上げた
全身がドロドロになっていくが、不意なぜか嫌な感覚に襲われる
全身の神経が一気に逆立って、何故かゾクゾクする、まるでＧストーンが拒否しているような・・・

『ゾォォンダァァァ！！』
「「『！！！ゾ、ゾンダー！！？』」」

何でこの世界に！？

「凱！あれって・・・まさか！！」
『信じたくはないが素粒子ＺＯを確認した！』
「ゾンダー！？・・・心さん見て！」

簪の言われた通りに見てみるとラウラの方を見ると形状が変化しＥＩ－１４のような形になった、ゾンダーは対象物を決めずに周辺を破壊していく

肩のキャノン砲、ビームキャノンを辺り構わずに放ち、手首のビームマシンガンを乱射し
一夏達を襲う、一夏は雪片弐型で必死に防御する、シャルルは反撃するが強固なゾンダーバリアに
阻まれダメージを与える事が出来ない

「ちぃ！簪！凱！行くぞ！ゾンダーが相手なら勇者の出番だ！」
『了解！先生には俺達が鎮圧すると言っておいた！』
「流石！手が早いぜ！行くぜ！『ギャレォォォン』！！！」

俺が叫ぶとギャレオンが現れる

『グォォォン！！！』
「マイク！」
『ＯＫだもんね～！システムチェ～ンジ！！』

「フュージョン！！」

俺はジャンプし体を丸めるそれをギャレオンが取り込み、変形を開始
ギャレオンの頭部は胸部になり、そこから人型の頭部が現れる
前足は手となり、後ろ足は人間のように真っ直ぐとなった
そして頭部のＧストーンが光る

「ガイガー！！」

簪は『サウンダース・ネクスト・オーバー』を展開する
どうやらマイクは待機状態からの移行をシステムチェンジと言っているようだ
腰のスラスターからＧＳライドのスモークを回転しながら噴出する

その中にドリルガオー、ステルスガオー、ライナーガオーが入ってくる
腰を回転させドリルガオーと連結する、腕を背に移動させ肩からライナーガオーが入る
そして背にステルスガオーがドッキングした、ギャレオンには鬣が付けられステルスガオーから腕をドッキングし兜が頭部に着く

「ガオ！ガイ！ガァァア！！！」
『座標軸固定ディバイディングドライバー射出！』

ディバイディングドライバーを出し腕と連結させる

「ディバイディングドライバァァァア！！」

ディバイディングドライバーにパワーを充填させシールドに突っ込むバババババン！！！シュ～！！
空間が捻じ曲がりシールドに穴を開ける
そこでは一夏とシャルルが必死の回避を行っていた

「ブロウクンマグナム！！」

ブロウクンマグナムを発射しサバイバルナイフで斬りかかっていくゾンダーを攻撃する
胸部に直撃し装甲がボロボロっと音を立てて崩れる
そこにはチューブで縛られているラウラがいた、どうやらコアと融合してる訳ないようだ
ＩＳ自体も若干大きくなっている、ラウラは捕られているかの様に縛られている

「一夏！俺が次、奴の胸部を攻撃してラウラが見えたら引きずる出せ！
ラウラは自分の意志で行動していない！」
「わ、解りました！！」

ゾンダーは胸部の修復を終え、立ち上げ肩のビームキャノンを放ってくる

「プロテクトウォォル！！」

リングを展開し防御フィールドを作りビームキャノンを防ぐ
そんな事お構いなしに連射してくる
ドォォン！！ドォォン！！ドォォン！！
ピシィン！！ピシィン！！ピシィン！！
するとキャノンのエネルギーが切れたのか、肩のキャノンをパージし手の甲からロングナイフを出し
突進してくる

「ガオガイガーに！！」

斬撃を体を沈ませて避け、カウンターで左腕で殴り付けナイフを砕くゾンダーは手首のビームマシンガンを構えるが発射させる前に手首を掴み力を込める
徐々にヒビが入り、手を粉砕する

「接近戦で勝てると思うなぁぁあ！！俺の友人は返してもらうぞ！！ドリルニー！！」

ドリルニーを回転させそのまま膝蹴りを喰らわせ胸部部分を全壊させラウラの姿が丸見えとなった

「今だ！一夏！」
「はい！！」

一夏は瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使用し一気に接近するが
ゾンダーは一夏に触手を伸ばす、取り込み気だ

「そうは・・・」『させないっぜ！！カモン・ロックンロール！！
ディスクM、セットON！！』
『ギラギラーンVV！！』「ギラギラーン・・・VV・・・！！」

肩のスピーカーから特定の機械の機能を麻痺させるマイクロ波を放射する
そのマイクロ波を受けたゾンダーは各所から煙を出し触手も止まる
一夏は両手でラウラをしっかりと掴みそのまま引き抜く

「聖心先輩！！今です！！」
「よぉし！！ゴルディマーグ！！」
『おう！久々の登場！！』

ゴルディがガオガイガーの隣に現れる

『ゴルディオンハンマァァア！！発動！承認！！
ゴルディオンハンマー！！セーフティデバイス！リリーブ！！』
「システム！チェ～ンジ！！」

ゴルディは上昇し上半身はハンマーとなり、下半身は折り畳まれ大きな手となった
ガオガイガーは右腕を外し

「ハンマーコネクト！！」
巨大な腕を着けハンマーを掴む
「ゴルディオン！！ハンマァァァア！！！」
ハンマーは金色に輝きガオガイガーも黄金となった
「ふん！」
聖心は光の杭を引き抜き上昇しゾンダーに突き刺し
「ハンマーヘル！！」
ゴルディオンハンマーで打ち付ける
「ハンマーヘブン！！ぐぉぉお～！！」
ゴルディの腕から杭を抜き取るためのパーツが出て、それを使い杭を抜きコアを回収し左手で握る
「光になれぇぇぇぇ！！！！！！！！」
そのままボディにゴルディオンハンマーを打ち付け、相手を光に変換しＩＳを待機に強制的に移行させた
シュヴァルツェア・レーゲンは元の姿に戻り待機状態に戻る
そしてコアには強力なＧストーンのエネルギーをぶつけてコアを元のコアに戻す
が、何故この世界にゾンダーが現れたのか解らない
俺達、勇者の戦いは始まったばかりのようだ

・・・

「・・・失敗したか・・・あの程度ではダメか」

「どうやら此方側でも邪魔をしてくる様ですな」

「ふふふ・・・やっぱり美しくないわね・・・あの金色のロボは可愛いけど」

「ウィィィン、新たな手を考える必要が有るようだな」

勇者対ゾンダー？　（後書き）

メイン人格は聖心のままです

驚きの嫁宣言と・・・ええ！？

「ええ～っと・・・今日は転校生？ッて言うのかな・・・」

翌日の朝山田先生が入ってきてＨＲが始まった
あの後は簪とこれからゾンダー出て来る事を考えて戦略を考える
その結果、一夏達に勇者の試練を受けてもらおうと思っている
これから仲間は必要不可欠だからな、得にイレイザーヘッドは使用したいからな

「なあ一夏、誰だとも思う？」
「さあ？」

入ってきたのは女子の制服を身にまとった
シャルルだった

「シャルル・デュノア改めましてシャルロット　デュノアです宜しくお願いします」
「「「「「ええぇぇぇぇ！！！！！！！！！！」」」」」

知ってはいたがやはり見るとシャルルに会うと驚くな

「え？美少年じゃなくて、美少女だったって事？」
「ちょっと待って！昨日って男子が大浴場使ったよね！？」

あ～あ・・・一夏は箒に睨まれている

「聖心さん！どういう事ですか！」

セシリアに詰め寄られる俺、俺が少し前に出ればキスが出来る距離だ

「待て待て近い近い、落ち着くのだセシリア、俺は昨日、大浴場を使える事さえ知らなかった
俺は昨日、シャワーで済ませた」
「本当ですのね！！？」
「ああ、信じてくれ」
「・・・／／／そ、そんなに見つめられると／／／解りました・・・信じます・・・／／／／／／」

顔を赤くし自分の席に戻るセシリア
が一夏は修理が終った甲龍を纏った鈴に襲われる

「ここで死ねぇぇぇえ！！！！！」
「ぎゃあぁぁぁ！！で死ぬぅぅぅ！！明日の新聞の一面を飾ってしまうぅぅぅう！！！」

こんなのか？

『ＩＳ学園にて女子生徒の嫉妬により男子生徒死亡』

クラスメイトの証言

『トマトでした』

・・・面白いかも
ドゴォォォン！！！！！！！
どうやら最大パワーで『空間圧作用兵器・衝撃砲、龍咆』を撃ったらしいな
まあ成仏せいや・・・ナンマンダブナンマンダブ・・・、煙がはれ

るとそこには
我が友人のラウラがシュヴァルツェア・レーゲンを展開し、一夏を救った

「た、助かった・・・ありがｔむぐぅ！！」

わおっ・・・一夏の唇奪ったよ・・・しかも見た感じで察すると・・・深い方
つまりディープだね、少ししてラウラを一夏から唇を離した

「お、お前を私の嫁にする！！決定事項だ！　異論は認めんからな！！／／／／／／」
「よ、嫁？婿じゃなくて？」

そっちなのかと突っ込みたい俺は普通だろうか

『おそらく普通だろう、俺も思った、俺は無性に一夏にヘル・アンド・ヘヴンをかましてやりたい・・・』

！？ちょっと凱ぃぃぃぃ！！？どうしたのいったい！？

『俺はあんな唐変木で甲斐性なしで鈍感な奴には嫌気がさすんだ・・・極稀にな・・・』

さいですか・・・凱ってそんな一面もあるんだ・・・
するとラウラが俺の方に来た、気のせいだろうか？顔を赤くし少しモジモジしている

「あ、貴方の事を！お兄ちゃんと呼ばせてください！！」
「『・・・はあぁぁあ！！！！？？？』」

おいおい!!??一気に妹キャラにイメチェンですか!?ラウラさん!!?

「調べた結果、私には貴方のお母様の遺伝子が混じっている事が解ったのです!」

「はあ!?母さんの!?」

実の所、俺は0歳で始めるパターンで転生した、そのため俺にはこの世界の父と母がいる

母は宇宙飛行士、父は大学の教授、しかも名前は父は獅子王　麗雄、母は獅子王　絆

おい何このガオガイガーファミリー?って思った俺は可笑しくないはず・・・

まあ・・二人共もう死んじゃったけど・・・

家族構成

父　獅子王　麗雄

母　獅子王　絆

長男　獅子王　凱

次男　獅子王　聖心　って感じ、凱喜んでたな~絆母さんと生活できて

「つまり!私は貴方の妹という事になるのです!!」

「・・・え~・・・なにこれ・・・友人が一気に妹ですか・・・・」

そう言ってる間にラウラはキラキラと目を輝かせて俺を見る・・・

止めて!そんな目で俺を見るな!!

「（凱!どうしたらいいの俺!?）」

『嫌・・・俺に聞かれても・・・』

流石の勇者でも困る問題

「（んだよ！今まで護に、凱兄ちゃん！って言われたくせに！）」
『嫌！アレは違うだろう！？血が繋がってないし近所のお兄さん的な感じだろ！護の場合は！？』

分かり易い説明だなおい

「（何かリアルだなおい例えが、最初はおじさんって言われたくせに）」
『それを言うなぁぁあ！！俺はまだ２１だ！！』
「（まあそれはさておきどうしたらいいの？一夏は・・・）」

箒に斬りかかられ、鈴に襲われ・・・

『まあ一夏はスルーで・・・』
「（うんそうだな）」

ナンマンダブナンマンダブ・・・

「（ここはあれか？止めた方が良いのか？それとも家族として接するべきか？）」
『・・・家族として接して良いんじゃないか？（棒読み）』
「（！？おいぃぃぃ！！？棒読みはどうよ！？・・・じゃあそれで行きましょう）」

ここまで５秒

「まあ・・・こんな兄貴でいいんだったら・・・」

「本当ですか！？有り難う御座います！」

満面の笑みで俺に笑いかけてくるラウラ

俺も笑顔で返す、ってかこの本当に誰？

まああれだ、一夏がラウラ泣かせたら光になれぇぇぇぇ！！！！！

！！！だな

妹よ、これからは俺に聞け！

朝６時、朝日が窓から差し込みさんさんと部屋を照らす中、俺は目覚めた
久しぶりに夢を見た、前世の夢だ、アイツと観覧車に乗って告った場面だった
あん時は恥ずかったな

「・・・え～！！！？？」

燐室である一夏が大声をあげた確かはシャルルが女と解ったため一夏一人のはず

「んだよ一夏・・・うるせ～な・・・」

目を擦りながら一夏の部屋に行き、中を見る、一夏は愕然とし一夏の隣には
何も着ないでシーツを羽織っているだけの我が妹、ラウラがいた

「・・・一夏・・・さっそく妹に手を出したのか・・・」

オーラだしながら一夏に問いかける

「い、いえ！違います！起きたらラウラがこんな感じに！！」
「・・・で？真実はどうなんだ？ラウラ？」
「はい、お兄ちゃん！日本では夫婦は包み隠さぬものっと聞いたものなので！
実際にやってみたのです！！」

うん、まずラウラの満面の笑み、これは可愛い癒されるレベル
それと・・・合ってるような間違いなような・・・

「誰に聞いた・・・」
「クラリッサっという私の部下です、日本の事をよく知っているらしく
嫁にこれが効果的だ言われたもので、はい！」
「うん、笑顔は１００点だ、がそれは間違いだラウラ！」
「な、なんですと！！」

逆転裁判みたいにラウラに指をさす俺
ラウラはそんなバカな・・・って感じ・・・めっちゃギャップあるな・・・

「それでは将来、元気でいい子が産めなくなる、将来の良い家庭を築きたいだろう？」
「も、もちろんです！お兄ちゃん！！」
「だったらまずクラリッサという人に聞くな！
疑問に思ったらまず！俺に聞け！メアドと電話番号は教えた通りだ、復唱！！」
「はい！クラリッサに物を聞かない！疑問に思ったらまず！お兄ちゃんに聞く！！」
「よろしい！ではラウラ、まずは服を着てこい、今の時間なら廊下には誰もいない」
「はい！」

ラウラは元気よくドアを開けて出て行った

「・・・てか番号教えたんですね」

「当たり前だろ、妹に教えない兄貴が何処にいる？」
「・・・（俺は弟子なのに教えてもらってない・・・）」

俺は一夏の部屋から出て自室に戻り朝御飯を作る
軽めの和食、それを３０分ほど掛けゆっくり食べて私服に着替えた
黒い長めのズボンに赤いと金色が中央で混じり合った半袖に明るめの黒のジャケットを
羽織った、今日はある人との買い物の約束があるんだ
セシリアではない、セシリアとの約束は前の休日に果たした
俺は学園から出た、俺は駅に向かって歩き出した、優しい日差しが俺に降り注ぐ
周りの人達は何故か俺をジロジロを見ている
俺は構わずに駅に向かう、駅の広場の中央の木の下で待っている人がいたが
多数の男供に絡まれていた

「ねえねえ彼女どこ行くの？」
「俺達と遊ばねぇ？」
「・・・無理・・・人を待ってる・・・」

嫌がるのにお構いなしに詰め寄る男供、俺はそんな男供に入って行った

「あん！？何だよお前は！？」
「彼女の待ち合わせ相手だ」
「・・・！心さん・・・！！」

簪は途端に笑顔になり俺に擦り寄るように向かってきた
俺は優しく甘く頭を撫でた

「さて・・・ご退場・・・願おうか・・・・？」

男供しか感じられないように限定的に殺気を出す
すると途端に男供の顔は蒼白を通り過ごし灰色とかした

「ひっ！ひぃや～！！！！！」

まるで化け物から逃げ出すように駆けて去っていく

「遅くなってすまんな、簪」
「ううん・・・私が早く来すぎたの・・・」
『Ｏｈ！気にする事ないもんね！今８時２８分だもんね！来たのが８時！
約束の時間より１時間３２分早かっただけだもんね！』

つまり俺が早く来なければ２時間も待っていた事になる

「お、おい幾ら何でも早く来すぎじゃないか？」
「・・・ごめんなさい・・・楽しみで・・・／／／」

しゅんっと落ち込んでしまう簪、俺は苦笑し頭を撫でる

「・・・？」
「別に怒ってないさ、でも今度から気をつけような？」
「・・・はい！」
「おし、じゃあ行こうか？」
「はい！！」

俺と簪は並んで電車に乗り目的地に向かう
・・・がそれを追跡する人影が・・・セシリア・オルコットである

「くぅ～！！私の聖心さんと出かけるなんてぇ～！！許せないですわ！」

おいおい何時からこの物語の主人公はこの人所有物になったんでしょうね

どうやらセシリアは二人を追跡するようです・・・ストーカーですか・・・

「大きなお世話ですわ！！」

そして二人（ストーキング者一名）はショッピングモールに到着

今回の目的は水着の購入だ、正直俺は泳ぐ気はない、海にはあまり興味がないからな

俺達は水着売り場に来ている

「・・・心さん・・・水着を選ぶから・・・そのぉ・・・／／／見てくれませんか・・・？」

「あまり参考にならんと思うが？」

「それでも・・・いい！！」

「・・・まあ頑張ってみよう・・・〈ピリリッピリリッ〉おっと電話だ

すまん少し外す」

俺はベンチに座り通話ボタンを押す

「もしもし？」

『お、お兄ちゃんですか？』

ラウラが早速電話をよこしてして来た

「なんだどうした?」
『じ、実は水着で相談があるのです、私は学校の指定の水着しかもっていないのですが
他の生徒から買った方が良いっと言われたのですが、私にはどんな水着を選んでいいのか
分からないので・・・相談を・・・』
「そうか・・・う〜ん・・・まあ参考にはならんかもしれないがラウラなら
可愛いビキニタイプがワンピースタイプいいじゃないか?
俺はあまり詳しくないが、店員さんに聞いてみて自分に似合う物を選べばいいじゃないか?」
『分かりました!有難う御座いました!お兄ちゃん!』

ピッ、電話を切る
でも此れからは雑学を増やさないといけないな

「ちょっと、アンタ」

俺は歩き出そうとした時、知らない年増女に話しかけられた

「アンタ此所の水着を片付けてちょうだい」
「残念ながらそれの水着に俺は触れていない、むしろアンタが触った物だろう」
「私の言う事が聞けないって言うの?なら・・・ちょっと〜警備員さ〜ん」
「アンタ・・・バカ?」

すると警備員が来た

「ちょっと君、この女性に暴力を振るったというのは本当かい？」
「いいえ？これで証明できますよ」
俺はボイスレコーダーを取り出しスイッチを入れる
『ちょっと、アンタ』
『アンタ此所の水着を片付けてちょうだい』
『残念ながらそれの水着に俺は触れていない、むしろアンタが触った物だろう』
『私の言う事が聞けないって言うの？なら・・・ちょっと～警備員さ～ん』
再生しきり俺はボイスレコーダーをしまう
「・・・これでどうですか？見ず知らずの学生をコキ使おうなんてね・・・ねえおばさん」
「なんですって！！」
年増女は俺に掴みかかる
「アンタ何様のつもりよ！！」
「まだ自己紹介してなかったか？俺の名は獅子王　聖心
男でありながら世界で２番目にＩＳを動かした男だ」
「「「「「なっ！！！！！」」」」」
証拠であるＩＳ学園のライセンスを見せて言う、警備員を含み女も驚く
「さあでは警備員さん？この年増女の連行、お願いできますね？

俺はここの会社の社長と繋がりがありますので悪しからず」
「（そ、そういえば上司が社長は世界で2番目にＩＳを動かした男と関係があると・・・）
わ、分かりました！お任せください！」

警備員は絶望している女を引きづりながら去って行った
やれやれ困った世の中だ、ＩＳを使えなければ女と男の地位は同じだというのに
まあ俺は偉ぶる気はないけどとなっているね、俺は水着を選んでいる簪の元に向かう

「決まったか？」
「は、はい・・・」

簪が選んだのは可愛らしいワンピース系の水着だ（ウエストの一部がシースルー）

「うんいいじゃないか？」
「！本当ですか！？」
「ああ、本当本当、嘘はつかん」

これに決め購入した、その時何か叩かれる音がしたが気にしてはいけないと思う

「さて・・・今１２時２６分、ちょうど食事時だな、どっかで食事にしよう」
「はい！」

俺と簪は近くのファミレスに入った
窓側の席に座り俺はグラタン、簪はミートスパゲティにした

少ししてスパッゲティとグラタンが運ばれてきた

「ではいただきます」

「いただきます・・・」

俺と簪はゆっくりと味わいながら食べ始めた

正直美味しかった、彼女との食事した時を思い出す

誰かと一緒に食べると美味しいものだ

「「ご馳走さまでした」」

俺達は精算を済ませてファミレスを出た

俺達は駅に行き電車に乗り学園へと戻った

「今日は有難うな、楽しかったよ」

「わ、私もです・・・」

俺は自室前で簪と別れて俺は部屋に入った

にしても・・・楽しかったな・・・でもなんでだ・

買い物中なんか視線を感じた気がしたんだけどな・・・気のせいかな?

その頃・・・セシリアというと・・・

「しまった・・・聖心さんへのプレゼントを選んでいたら・・・見失ってしまいました・・・」

ストーキングに失敗していた・・・

臨海学校

俺達は今臨海学校でお世話になる旅館に向かっている最中だ
バスに乗っている、俺は窓側の席、でも何故かラウラは俺の膝の上
にこじんまりと座っている
がそこはまったく問題ない、寧ろ問題なのは俺の気持ちの方だ
俺は海には良い思い出がこれでもかと言うほどない、それは今まで
海で俺を恨んだりしている輩に
決まって攻撃されるからだ、そのおかげで彼女にも迷惑を掛け俺自
身、何度か死にかけた事がある
その為か俺は何時からか海が大嫌いになったのだ、この世界で家族
で来ても俺は砂浜にパラソルを立て
その陰でじっとしていた、俺はいつの間にか窓に頬杖を付き窓から
外を眺めていた

「お兄ちゃん？」

はっ、いかんいかんラウラが話しかけて来たのに反応が遅れるとこ
ろだった

「何だ？」
「どうしたのですか？心無か、悲しげな顔をしていますが・・・」
「ああ悪い、心配させたな」
「本当大丈夫ですか？先輩？顔色が少し悪いですよ？」

俺の隣に座っている一夏も話しかけてきた

「・・・俺は海が・・・嫌いなんだ・・・」
「え！？何でですか？」

「海に行くたびに俺を恨んだりしている輩に決まって攻撃されるからさ
どうも俺は人の恨みをかい易い人間みたいだ」
「大丈夫ですよ！お兄ちゃん！そんな奴らは私が撃退して見せます！」
「俺もです！」
「・・・さんきゅ・・・」
「よし！嫁よ！ここはお兄ちゃんに攻撃するという不届き者を発見次第、天誅を与えるぞ！」
「イエス、マム！」

・・・ありがとよ・・・
俺は心の中で二人に礼を言った

『心、それだけじゃないだろう？ゾンダーが来るかもしれないという事を考えているんだろう？』
「（・・・ああ・・・臨海学校中に出くわす「福音」とゾンダー・・・この二つが気がかりだ）」
『どうする？Ｊにも出てもらうか？』
「（いや・・・いい・・・）」

俺は警戒心を持ちながら到着した旅館に入った
どうやら俺と一夏は織斑先生と同じのようだ、おそらく消灯時間になって俺達の部屋に女子が来ないための
策だろう、正直有り難い、これなら凱も実体化が出来てゆっくりできる
一夏は荷物を置くとさっそく水着を持って駆けて行った

「やれやれどこまで行ってもガキだな、ん？獅子王、お前は着替え

て行かないのか?」
「ええ・・・俺は泳ぐ気ありませんから・・・せめて半ズボンにジャケット羽織るぐらいして行きますよ」
「そうか」

織斑先生も部屋から出て行った

「凱はどうする?」
『俺はガオーマシンの整備をしてる、楽しんでこいよ』
「海じゃあまり楽しめようにないけどな」

俺は一応トランクスタイプの奴を持ち、女子に引きづり込まれた時の保険だ
それと薄いジャケットを羽織り更衣室を出る
そして外に出ると太陽が眩しい・・・俺はどちらかといえば夜型なのだか・・・
適当に歩き始めると、何故か埋まっているウサミミがあった、それとひっぱって!っという札
とりあえず俺は触るな危険という、札をぶっ刺した・・・うんこれで誰も過ちを起こさないだろう
そして再び歩き始める、すると一夏と同室であったシャルロットと・・・バスタオルお化け?がいた
何このシュールな絵・・・

「なあシャルロット・・・その・・・バスタオルお化けはなに?」
「え~っと・・・ラウラです・・・」
「・・・これが・・・?」
「恥ずかしいみたいで・・・」
「ラウラ~出てきな、暑いだろう?」
「で、でも・・・実際着てみると恥ずかしいのです・・・///////

／／」

「もう！じれったいな！それぇ！！」

シャルロットは強引にバスタオルを取った

そこには可愛いらしいビキニタイプの水着を着け、綺麗な肌にツインテールが似合うラウラがいた

「なんだ、似合ってるじゃないか？一瞬見惚れたぞ・・・」

「そ、そうですか・・・？」

モジモジとした姿に俺は軽くドキドキするのだった、破壊力が半端ないぞ！？

「あ、ああ・・・一夏に見せてきたらどうだ・・・」

「そうですね！有り難う御座います！お兄ちゃん！」

ラウラはシャルロットは引き連れ走って行った・・・

正直・・・鼻から愛が出そうだった・・・それぐらい半端ない威力だ・・・

・・・俺はそれから誰にも悟られないように海に面した崖に移動した

波が打ち付けている、気づけばすでに日は傾いていた・・・考えるのはゾンダーの事

これからゾンダーが行動をすればこちらも本格的に動かなければならない・・・

そうすれば必然的に勇者の力を使わなければならない、それはつまり一夏達に勇者の試練を受けてもらう必要がある

正直、唯のＩＳではゾンダーに太刀打ちできずゾンダーに吸収されるのが落ちだ

ゾンダーに吸収されず戦うにはＧストーンの力を使うしかない

・・・でも正直な事を言うと皆をゾンダーとの戦いに巻き込みたく

ない
これは俺と凱、簪、俺達勇者の問題だ・・・

凱の珍しい飲酒

俺は崖に腰掛け海を眺めている
一瞬、この母なる海をゴルディオンクラッシャーでひかりにぃぃなぁぁあれぇぇえ！！！！
ってしたくなったのは秘密だよ、凱に怒られちゃう

「聖心さ～ん」

不意に後ろから声を掛けられたので後ろを向くとセシリアがいた

「なんだ？」
「もうすぐ夕食の時間ですよ？」
「もうそんな時間か？じゃあ急ごう」

俺はセシリアと共に旅館に戻り俺は浴衣に着替えたが、中々うまく行かず凱に手伝ってもらった
そして夕食がスタートが・・・

「うう・・・」
「セシリア、足が辛いなら我慢しなくても・・・」
「こ、この程度の辛さで・・・」

理由は簡単、正座をし手足が痺れて辛い
シャルロットも正座しているが日本の事を勉強し、正座は何回か経験済らしい
因みにラウラは何故か俺の膝の上だ

「なあラウラ、どうして俺の膝の上なんだ？」

「それは嫁とはまったく違う絶大な安心感があるからです！もしかして・・・
迷惑でしたか・・・お兄ちゃん・・・？」

妹よ・・・涙目の上目遣いなんて高度テクニックをどこで身に着けた！？（偏った知識の塊から）
その可愛さからのそれは反則レベルだぞ！？

「別に構わんよ」

俺は笑顔でラウラの頭を撫でる
ラウラは気持ちよさそうに体を捩る・・・なにこの可愛い生物は・・・
・・・すいません一回でいいから抱きしめたいです・・・落ち着け俺・・・
いくらギャップが有り過ぎると言えど妹だ・・・
気持ちを落ち着け刺身に手をつける、本山葵を付けて食べる
・・・うん、この鼻を突くような感じが良いね

「美味い」
「お兄ちゃん、その緑色のは何ですか？」
「私も疑問に思っていたのです、何なのですかこれは？」

そうか、外国生まれで日本の事を知らないんだったらしょうがないな

「これは山葵って言って独特の強い刺激性のあって日本じゃ寿司や刺身にはこいつを付けて食べるんだ」
「そうなのですか・・・」
「ではでは」

セシリアとラウラは山葵を箸でつかんでそのまま口に運んだ

「あ！待て！！」

「「～～～～～～～～～～～～～～！！！！！！！！」」

二人は山葵特有の鼻につんとくるの刺激的な辛さに涙する
が涙ながら飲み込んだ

「と、とても刺激的なお味でした・・・」

「おいおい、無理すんな」

俺が二人に茶を差し出すとそれをかなりのハイペースで飲み干した
ラウラはまだ辛そうだが、再びチャレンジしようとしている

「大丈夫か？無理するなよ、ってか直で食べるな」

「で、ですが・・・これが嫁とお兄ちゃんの国の味であるのなら・・
・」

俺は刺身に少量の醤油と山葵を付けた

「・・・ラウラ、口開けたままで」

「え？はむっ」

優しくラウラの口に刺身を入れた、ラウラはそれを噛み始めた

「・・・おいしいです！」

「だろ？何かにつけて少量ならいいのさ」

「うぅ・・・」

セシリアは足がかなり痺れて食事も辛そうだ

それを見た俺はラウラと同じ事をした、そして簪にもやらされた、
嫉妬って怖いね
そして俺は部屋に戻り凱のために牛丼を作り、凱はそれを夜景を見
ながら食べている
すると織斑先生がと一夏が帰ってきた

「あ！凱さん、こんばんわっす」
「ああ、こんばんわ」
「凱、やはりお前も食事はするのだな」
「ええ、本当は必要ないんですけど、牛丼は俺の好物でして・・・
ご馳走様でした
今日も美味しかったよ、心」
「そりゃどうも」

この部屋には小さいがキッチンがある、そこで寮で下拵えしておい
た牛丼をここで仕上げたのだ
俺は丼を洗う、すると一夏が先生のマッサージに入った
よほど気持ちいいのか普段では考えられない声をあげる先生

「なあ、凱、この人って織斑先生だよな・・・？」
「そのぐらい気持ちいいんじゃないか？」
「ふう・・・一夏、少し待て」

先生は立ち上がりドアを開けると雪崩の如く６人が入ってきた
その中にラウラが居たので俺と凱は思わず頭に手をやった

「「ラウラ・・・そんな趣味が・・・」」
「ち、違うのです！お兄ちゃん！ってその男は一体！？」
「ってあれ！？誰！？」

凱に会った事のないラウラとシャルロットは驚く

「聖心、一夏、お前らは風呂に行って来い」
「そうします、後頼まれたものはテーブルの上です」
「じゃあ行ってくるぜ」

俺と一夏は風呂に出かけた

凱サイド

さて二人が風呂に行ったはいいが女子達は部屋に入れられ座らされたそして全員にジュースを渡し飲んだのを確認すると自分もビールを飲み始めた

「口止め料という事ですか」
「そういう事だ、凱、お前もどうだ?」
「では、お付き合いします」

俺もビールを一本開けて口に含んだ、アルコール分は久しぶりだ

「教官!その男は一体誰なのですか!?」
「僕も知りたいです」

ラウラとシャルロットが声をあげた、この二人には俺の事を話していないからな

「ラウラ、お前の敬愛する兄の兄だ」
「え!?」
「コイツの名は獅子王　凱、聖心の兄だ」

「よろしく」
「え～！！？す、すいませんでした！お兄ちゃんの兄上とも知らず！！」
何故か土下座するラウラ
「別にいいさ」
「でもさ、何で聖心さんのお兄さんがここに？」
シャルが疑問に思う
「それは俺が聖心のＩＳのＡＩとして生きているからさ」
「「ええ！！？」」
「俺は昔事故にあってな、ある科学者のお陰でこのＩＳにＡＩとして生きているんだ
まあ動力源の力を使って実体化が出来るんだ」
「そ、そうなんだ・・・」
「そうでしたか・・・」
二人は呆気を取られたような感じだ
「それで？君等は一夏と弟のどこが好きなんだい？」
「「「「「「！！！！！！」」」」」」
「いきなり聞くな、凱」
「そうですか？これではっきりしていいんじゃありませんか？」
全員の顔が赤くなる
「わ、私はそのぅ・・・一夏の優しい所が・・・／／／」
「同じく・・・／／／」

「私は・・・私の立場の責任とお、お優しい所が・・・／／／／」
「・・・専用機の手伝いをしてくれて・・・憧れみたいな人だから／／／」
「嫁に心打たれたからです」
「・・・僕の事を守ってくれたから・・・／／／／」

がこの答えは先生によって一蹴された
なら聞くなよ・・・

「ふむ、一夏はやれんが聖心は別だな凱、お前から見て聖心はどんな奴だ？」
「俺から見て？・・・言うなれば・・・勇者ではあるが心に傷を負った可愛そうな弟です」
「何？」
「どういう事ですか！？兄上！！？」

得にラウラ、簪、セシリアが反応した

「心はいつもペンダントをしてるのは知ってるか？」
「ええ、もちろんですわ」
「綺麗だよねあのペンダント」
「そのペンダントは曰く付きでな・・・昔にな心は仲のいい友達がいたんだ（この世界で）
その友達とはいつも遊んでた、だけどある時、その子が自分のせいで事故で死んだ
あのペンダントは友情の証なんだよ　（まあ彼女との絆のペンダントもあるが）
そのせいで心は心に深い傷を負ってしまって友達を作る事を激しく嫌った
また自分のせいで死んでしまうのではないか、そんな恐怖に囚われ

たんだ
今はなんとか立ち直っているがまた何時その事を思い出すか不安なんだ
だから心をこれからも安心させてやってくれ」

全員黙って聞いていたがその凱の問いには当たり前！っと強い答えを返した
その言葉に凱は深い安心感に包まれた、自分の役目は聖心のサポートだからだ
前の世界での彼女の事も気にかけていた、だからこそ心の心のメンテナンスは大切なのだ
凱はビール片手に聖心の作ったつまみを食べた、千冬も食し絶賛し

「奴と結婚できる女は一生幸せだな」

っと言って約2名の頬を赤く染め上げた
それと凱はラウラに兄上ではなくお兄様と呼ばれる事になり
凱は少し照れていた
そして二人が帰ってきた

「ふう～良い湯だったぜ」
「気持ちよかったな～」
「お兄ちゃん！私は凱さんの事をお兄様と呼ぶ事に致しました！」
「へ？」

思わず拍子抜けした声をあげてしまった

「俺が兄だって事言ったらこうなっちゃって」
「ははは・・・はあ・・・」
「さあ、他にマッサージ受けた人いるか？」

一夏がそう言うと箒、鈴、ラウラ、シャルが手をあげた
そして俺は簪、セシリアをマッサージする事となった

しばしの間この部屋で、謎の声が聞こえる事となった
そして皆は自分の部屋に戻り俺達も布団に入った
が俺は眠らない、明日の事で頭がいっぱいだ

『心、寝ておけ、明日は大変なんだから』

ＡＩ状態に戻った凱が話しかけてきた

「（でもさぁ明日ゾンダーが来ると考えるとよ・・・寝付けないぜ）」
『作戦なら俺が考えておくから寝ておけ、お前だけの体じゃないんだぞ？』
「（そうだったな・・・凱の体でもあるんだよな・・・ワリィもう寝るよ）」

俺は目を閉じ眠る事にした

『凱、聖心は寝たのか？』
『ああ、ぐっすりだ』
『そうか、やはり明日は私もスタンバっておこう』
『ああ、俺も準備しておこう、準備にするのに越した事は無い』

史上最強の破壊神　降臨

翌朝、今日はＩＳの各種装備運用とデータの収集的な事をすることになった
がそんな時に・・・

「ち～～～ちゃぁん！！！！！！」

現れたのはＩＳの生みの親、篠ノ之　束だ
織斑先生は見事しか言えないアイアンクローを決める
お～これがアイアンクローか・・・ゾンダーにも効くかも・・・
でもそれだと生身でゾンダーにダメージを与える先生が凄い事に・・・

「獅子王、今、失礼な事を考えただろう？」
「いえ、そんな事は」

何故か俺の考えを読まれた・・・因みに俺は先生の助手をしている
そして俺達、専用機持ちは召集された
召集理由はアメリカ・イスラエルが共同開発した軍用ＩＳ、銀の福音の暴走
そして俺達が対象しろというものだった
俺と簪は今回ゾンダーが出て来る可能性があると視野に入れ行動する事にした
そして俺達はＩＳを展開し福音に向かった
俺はステルスガオー装備のガイガーで簪はバリバリーンに乗った状態で
しばしして見えてきたのは白・・・というより白銀か？
あれが銀の福音　シルバリオ・ゴスペル・・・速度的な問題もあり

俺と簪が到着した時には
戦闘が始まっていた、俺はすかさずガオガイガーになったが、その時、一夏が海に落ちて行った
俺はディバイディングドライバーと展開し海に高速を保ち突撃した

「ディバイディングドライバァァア！！」

ディバイディングドライバーにパワーを充填させ海に突っ込む
ババババババン！！！シュ～！！
すると海に金色の光が走りガオガイガーを中心に１００m伸びていく
そして海が割れ丸く円になるように海面が押し避けられ中心部には
一夏が横たわっていた
箒は一夏を抱き起こしそのまま飛び上がる

「箒！ここは俺と簪が引き受ける！」
「で、でも！」
「行けぇ！一夏を救いたいだろうが！？」
「！！！・・・はい！！！」

多少納得できなさそうに撤退していく
俺はディバイディングドライバーをしまい上昇する

「行くぞぉぉおお！！」

福音は銀の鐘（シルバー・ベル）を回転しながら此所ら一帯に撒き散らした

「プロテクトウォォル！！」

ウォールリングを展開しプロテクトシェード展開し銀の鐘（シルバー・ベル）を防ぎつつ

エネルギーを収束させ跳ね返すが、それはあっさりと回避された
簪はその回避によって生じた隙を付き『G・ガーディアン・ブレード』で斬りかかる
それは体の大部分に直撃し大きく吹き飛ばす

「ファントムリング！！プラァス！」

ステルスガオーに搭載されているファントムリングを右腕に通し、
腕の回転と連動させ
高速回転させる

「ブロウクン！ファントムッ！！」

そのまま腕を射出し福音に命中させる
福音は大きく吹き飛ぶがそこで大きな光を放ち形状が変化していくが第二形態移行ではない、形状は大きく変化し翼は紫に染まり機体カラーは黒と紫
パーツの一つ一つが巨大となりガオガイガーより巨大かもしれない

「凱！こいつ！」
『ああ！第二形態移行の瞬間にゾンダーが入り込んだ！』
『なら、さっさとジェネシックに移行しろ、それまでは私が時間を稼いでやる』
「Ｊ？！なら頼む！凱！」
『ああ！』
「簪！少し時間を稼いでくれ！」
「・・・了解です・・・！！」
『いくっぜ！カモン・ロックンロール！！ディスクＭ、セットＯＮ！！』
『ギラギラーンＶＶ！！』「ギラギラーン・・・ＶＶ・・・！！」

肩のスピーカーから特定の機械の機能を麻痺させるマイクロ波を放射するが
ゾンダーの動きは少ししか制約できない
ガオガイガーはガイガーに戻り、緑色の光に包まれた

「では行くぞ！」

そして代わりに出てきたのは白亜の戦艦・・・全長はガオガイガーを上回る

『すでに衛星などのこちらの戦闘の記録を取れるような機器はすべて封じた』
「では行くぞ、フュージョン！」
すると白亜の戦艦の艦橋部分は分離し人型の形態となった

「プラズマウィング！」

淡いピンククリアの翼が広がる

「ジェイダー！メガフュージョン！！」

ピンククリアのプラズマウィングが広がり戦艦は艦の先端を残し曲がり足となった
そして頭部、腕部が付き、額のＪジュエルが輝く

「キングゥ！ジェイダァァア！！」

ジャイアントメカノイド・キングジェイダー、勇者ではなく戦士の姿

『ＷＨＡＴ！？Ｏｈ！！Ｊ！！良い所にきたっぜ！！』
「どうやらそのようだな、凱と聖心のじゅんびが出きるまで時間を稼ぐ
５連メーザー砲　！」
指部一つ一つが砲門となる５連メーザー砲を放ちゾンダーを吹き飛ばす
簪はキラキラとした目でキングジェイダーを見る
「・・・か、かっこいい・・・！！！」
「簪とやら、ここは私が時間を稼ぐ」
Ｊは更にメーザーミサイルを放ち動きを封じる
するとガイガーが金色の光は放ち始めた
「おぉぉぉお！！」
『ジェネシックマシン！！』
スパイラルガオー、ストレイトガオー、ブロウクンガオー、プロテクトガオー、ガジェットガオー
全てのジェネシックマシンがジェネシックガイガーの回りを蹂躙する
「よっしゃぁぁあ！！ファイナルフュージョン！！」
ガイガーの腰だけが回転しＧＳライドのスモークを回転しながら噴出する
その中にスパイラルガオー、ストレイトガオー、ブロウクンガオー、プロテクトガオー、ガジェットガオーが入ってくる
そしてかなりスピード維持したままスパイラルガオー、ストレイト

ガオーは脚部に向かい
ドリルが膝の部位に移動し、2機のジェネシックマシンの中に足が入り固定される
腕を背に移動させ、ストレイトガオー、ブロウクンガオーは尾の部分がジョイントとなり
肩の中でドッキングし胴体部から腕が出て来る
そして背にガジェットガオーが行き爪でブロウクンガオー、プロテクトガオーをしっかりと掴み、手が付けられ中から黄金に光り輝く、鋭い指が顔を出す
更に赤く光る黄金の鬣が付けれギャレオンの目が輝く
ガジェットガオーから兜が装備されGストーンが輝き、髪の毛が伸びる

「ガオ！ガイ！ガァァア！！！」

それは最強の破壊神、それは勇気の究極なる姿、我々がたどり着いた大いなる遺産
その名は勇者王　ジェネシックガオガイガー！！

史上最強の破壊神　降臨（後書き）

次回！究極の勇者王がその力を見せつける！

主人公設定

獅子王（ししおう）　聖心（せいしん）

年齢　１８歳　（転生前）→転生後　１８歳
ＩＳ適正　ＧＧＧ
容姿　目の色が黒の獅子王　凱
　茶色の長髪、いつもは後ろで束ねポニーテールのような感じにしている

今作の主人公
転生者でありＩＳ『ガオガイガー』の所持者であり勇者の称号を持つ
ＩＳの世界では０歳から始まる転生をし、前世の記憶などで天才などと呼ばれるが
本人は激しくそれを嫌っている、転生した世界でもっとも仲が良かった親友を
自分のせいで事故で失ってしまい
心に深い傷を負ってしまい友達を作る事を激しく嫌ってしまう
また自らのせいで誰かが死んでしまうのではないかと心の奥で恐れている
現在は立ち直っているが、心の傷が完全に癒えたわけではない
心の奥の底に途轍もない規模の悲しみを抱いている
最近、妹であると判明したラウラにとても優しくしておりシスコン気味
常に自分の言動や行動を証拠と反省するためにボイスレコーダー内蔵型のカメラを
持ち歩いている

獅子王　凱（がい）

年齢　２１

ＩＳ適正　ＧＧＧ

今作のもう一人の主人公
我らが勇者である、聖心のＩＳ『ガオガイガー』のＡＩとして生きている
が、以前はちゃんとした肉体があり獅子王麗雄、獅子王　絆の間に生まれた
獅子王家の長男として誕生、聖心の兄であり人類最強の勇者
心に深くひどい傷を負った聖心の事を人一倍気にかけている
そしてその深い悲しみがゾンダーに利用されるのではないかと不安を抱いている
ＡＩとなったからはＧストーンの力を使い実体化が可能になっている
実体化している間はエネルギー補給が無用であるが牛丼をよく食べる
聖心と意識の交代が可能
その場合凱が聖心の体を制御下に置き聖心はＡＩとなりサポートをする
凱自身、聖心はこの学園生活で心から笑う、本当の笑顔を取り戻してほしいと願っている

破壊神の力

ううん・・・俺は目を覚ますと箒と千冬姉。皆が俺を見ていた
俺は福音の攻撃を食らい気を失ってしまったらしい

「俺、福音に蹴り入れてくる」
「まて、織斑、現在獅子王と更識が戦闘中だ、その影響かは分からんが映像、音声全てがキャッチ不能となっている」
「だったら尚更行かなくては!!」
「・・・はあ・・・ここまで着たら聞かんからなお前は・・・専用機持ち、全員で行け、それと私もいく」

こうして再び俺達は福音がいる地点に向かった
すると緑色の竜巻が見えてきた、よく見ると更識さんが動きを止めているように見える
そして一瞬でかいものが見えた気が・・・

「あれは・・・いったい・・・」
「あれって・・・ファイナルフュージョンの時・・・」

そして竜巻が晴れ現れたのは全身が黒く長い髪を靡かせている
赤く光る黄金の鬣、黄金に光り輝く、鋭い指
そして胸のライオン・・・あれって・・・

「ガオ!ガイ!ガァァア!!!」

全身から緑色の光を放ち顔の兜から不必要な熱を排出した

「ガ、ガオガイガー！？」
「って事はアレ先輩！？」
「あれがお兄ちゃんなのか！？」
「今まで見た二種類とは形状が違いすぎる！！」
「なんだか・・・今までとはまったく違う勇ましい感じが・・・」

聖心サイド

ついに光臨した最強の勇者王にして最強の破壊神、勇気の究極なる姿
ジェネシックガオガイガー・・・これまでの二種類のガオガイガーとは違う
破壊、消滅それらを司る・・・究極の姿・・・

「心、問題は？」
「ああ・・・いい気分だ・・・」

ジェネシックでは俺と凱の意識が融合する、むしろ融合した方がGストーンの放つエネルギーの純度が桁違いになる
JはすでにIS内に戻った、もう時間稼ぎが必要ないからだ
福音はゾンダー化した事で異常強化された銀の鐘（シルバー・ベル）を回転しながら
此所ら一帯に撒き散らす
それがほぼ全弾が命中する
それは止まないナパーム弾を喰らったかのような大爆発を引き起こすが
無限波動であるジェネシックオーラの鎧、ジェネシックアーマーの前には無意味
傷一つ付ける事さえ許されない、破壊神は相手の攻撃され自らの鎧で破壊する
そして可変翼のガジェットフェザーを展開した、そしてジェネシックの姿は消えた

ゾンダーは焦って見渡すが姿は見えずが、ゾンダーはいきなり強い
衝撃と共に海面に叩きつけられた
しかも殴られた頬が光になっている、グラビティ・ショックウェー
ブを放つゴルディオンネイルによって頬の部分が光に変換されたの
だ、ジェネシックはその巨体に似合わぬ異常なほどの速度を発揮し
ゾンダーの直上に移動した

「「うぉぉお!!」」

凱と聖心の声と共に腹を殴られ、空中に異常な速度で飛ばされる
雲を貫通し雲が一気に晴れる
そしてジェネシックは髪の毛状のエネルギーアキュメーターが煌や
かな光を放ち
速度を上げジェネシックはゾンダーの内部に腕を食い込ませた
食い込んだ部分は光に変換されていき
ジェネシックは福音の操縦者と共にコアを引き抜いた
そして福音はゾンダー化が解除され元の状態に戻った
操縦者とコア、福音はジェネシックに抱かれている

「・・・これが・・・ジェネシック・・・」

勇者と幸せ？を告げる福音と・・・

俺はジェネシックの手と腕の部分のみを部分解除し女性とコアと福音を抱いている
俺は正直、興奮と驚きに浸っている
興奮は憧れのジェネシックになれた事、今までは訓練は鍛錬のためにジェネシックを使えなかった
それとこれからもジェネシックはあまり使わない方針でいくつもりだなんでかって？・・・ＩＳ学園とか色んな所、消し炭してもいいんだったら使うよ？
ジェネシックのパワー・・・侮らないほうがいいよ？
ここが海だったらジェネシックのテストも兼ねて使ったんだから
何も障害無いし、あったとしても無人島だったり、海から突き出した岩とかだし
すると織斑先生を筆頭に俺に近づいてきた

「獅子王、その姿は何「先輩！！カッコよすぎです！！合体から見せてください！！！」
・・・人の言葉を遮るな！」

先生が打鉄の武装で思いっきり一夏を殴った
痛そう・・・てか下手したら死ぬよ・・・？

「心さん・・・カッコいい・・・／／／」

簪が顔を赤く染めながら言う

「お兄ちゃん、素敵です！！」

ラウラも笑顔で言う、ラウラの場合は強さに惹かれているのだろう

「本当にすごいパワーでしたね、それにスピードも圧巻です」

セシリアは素直に性能に驚いている

「あ、あんたそんなに強かったの・・・？」

鈴は戸惑っている、ＩＳの常識を超越した戦闘風景だったからな

「・・・聖心さん・・・やはり私にも一夏と同じ鍛錬付けてください！」

と言う箒、実は箒も一夏と共に鍛錬している

まあ、一夏は応用編、箒は基礎編だな

「まあ、取り敢えず今はこの人を運ぶのが優勢でしょう？」

お姫様抱っこしている女性を指差す、全員が了承し旅館へと進路を進めた

そして俺はかなりの疲労感に包まれてた

戦闘中での急激なジェネシックガイガーへの移行、凱との打ち合わせも無しでの融合

本来、ジェネシックへの移行は待機状態で行うのがベスト

これは使用時に行えば操縦者に、精神及び肉体的に負担が有るが故である

精神融合に置いては事前にお互いに準備を済ませた上で行う必要がある

これ無しに行えば聖心に精神的に負担があるからである

これらの負担は全て聖心が負担しているため凱には一切負担が無い

が凱はそれを

『これで・・・本当に良いのか・・・』

っと感じている

聖心が負担を一任している理由は今までにヘル・アンド・ヘヴンの

負担で命を削ったため

聖心が

「凱には出来るだけ負担を感じずに生きてほしい」

っという願いからであった

俺は旅館に戻り女性と福音を先生に預けて、俺は布団に入った

異常なほどの疲れと精神を磨り減ったような感覚

これがちゃんと準備を行わず移行した代償

今回は時間が求められたからしかたがない

そしてこの代償は絶対に凱には受けさせない

凱はすでに代償を払いつづけた、だから代償を払う必要はない

この代償は絶対に俺に来るようになっている、凱でされこの設定は

覆せない

凱には俺が一人前になったら幸せに暮らしてもらうんだ

この世界に転生する時、もう一つ願いを言った

凱の恋人、卯都木（うつぎ）　命（みこと）をこの世界に転生させてくれと

凱は既にこの事を知っており、命と再会し喜んでいる

そしてGストーンの力を使えば凱の肉体を元に戻し、エヴォリュダーとして生きていける

俺は絶対に凱に幸せになってほしいとっという願いと共に眠りに着いた

そして今は俺はバスに乗り込もうとしている
まあ、友達との思い出作りとしては楽しかったな
乗ろうとすると・・・

「獅子王　聖心君っているかしら?」

俺を呼んだのは福音の操縦者　ナターシャ・ファイルスだった

俺は彼女の方に近づいていた

「俺ですけど?」
「ああやっぱり貴方ね・・・やっぱり、絆さんと麗雄さんに似てるわね」
「父さんと母さんを知ってるんですか?」
「ええ、もちろんよ、二人には色々とお世話になったから」

父さんと母さんはとんでもなく有名だ、そのため俺の人脈もとんでもないのもこのお陰

「（今度貴方の家訪ねるから、電話番号教えて）」
「（何しに来る気ですか?）」
「（ただ、信望を深めたいだけよ♪）」
「（いいですよ）」

俺は持っていたメモに携帯の番号を書き渡した

「ありがと♪勇ましき勇者さん♪」

チュッ?

俺の唇に触れるだけのキスをし彼女は去って行った

俺は処理落ちを起こしセシリアと簪そして一夏ＬＯＶＥＳの俺の妹、
ラウラにボコられた

ナターシャサイド

絆さんと麗雄さんが自慢していた理由が改めて分かった気がした
あの子には正直、心を奪われたわ
彼に抱かれている時に、彼の顔が見えた気がしたの
勇ましく、凛々しい顔、私の好みドストライク♪
さあ、これから勝負よ、勇者に恋する乙女達♪

勇者と幸せ？を告げる福音と・・・（後書き）

ナターシャさんってこんな感じでいいんでしょうか？

勇者の試練その一　戦士の試練　誇り高き空の戦士と白き騎士

本日は休日だが本日は、一夏、箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、簪、千冬に
アリーナに集まってもらった、集まってもらった表向きな理由はラウラのトーナメント時の変化と
福音の謎の変化、この秘密を教える事

「獅子王、福音に起きた変化を教えろ」

先生が強い口調で俺に言う
既に全員がアリーナに集まっている

「ええ、ラウラにも起きた変化・・・ですが条件があります」
「条件・・・ですか？」

セシリアが疑問の声をあげる

「どういう事だ？獅子王」
「あの変化はゾンダー化と言い通常のＩＳでは太刀打ちが出来ません」
「どういう事ですか！？お兄ちゃん！？」

ラウラが驚きの声で俺に聞く

「ゾンダー化した物は周りの機械を取り込んで自らの力とする能力がある
ＩＳにとって天敵と言っても良い、対抗で切るのは今の所、俺と凱、簪だけです」

「それはなんでですか？聖心さん？」

俺はＧストーンをガオガイガーから複製して取り出す
Ｇストーンは煌やかな光を放つ

「綺麗・・・」
「獅子王、なんだこれは？」
「これは無限情報サーキットＧストーン、ゾンダーが放つエネルギーとは真逆の
エネルギーを放つ物です、俺と簪のＩＳにはこれが搭載されています
これが搭載されている結果俺達はゾンダーに取り込まれる事無く戦闘が出来ます
そして皆にはＧストーンかＪジュエルを持つに相応しいかどうか試練を受けてもらいます
これは強制ではありませんが、受けない限りゾンダーとは戦えません」
「・・・受けるに決まってます！師匠の敵は俺の敵です！」
「私もです！」
「私も！」
「あたしも！」
「お兄ちゃん！私もです！」
「私も！」
「・・・わかりました・・・まあ先生は受けて下さなくもいいですってか先生は
Ｇストーンが認めています、じゃあ最初は・・・一夏！お前だ！」
「はい！」

一夏は手を挙げる、そして一夏にアリーナの中心部に行きＩＳを展開するように指示した
俺達は客席に移動した

「（じゃあ誰が行くか・・・）」
『心、Ｊが行くって言ってるけどどうする？』
「（Ｊが？分かったＪに任せよう）」

そしてガオガイガーから赤い光が放たれて一夏の前に伸びそこにＪが現れる

「少年、お前の試練の相手は私だ」
「「「「「！？アンタだれ！？」」」」」「誰だ？」
「彼はソルダートＪ　戦士だ」
「戦士？勇者では無いのですか？」
「ああだが、強いぞ」

一夏サイド

俺の目の前にソルダートＪという人が目の前にいる
先輩はＪさんは勇者ではなく戦士と言っている、そして強いと

「少年よ、試練に合格するのには私に勝つ事ではなくお前の覚悟と強さを私に見せろ」

覚悟と強さか・・・やってやるぜ！

「では行くぞ！スタンダップ！ジェイダー！」

Ｊはジェイダーを展開しプラズマウィングを展開し浮いている
一夏も白式第二形態・雪羅を展開する、昨日の聖心との模擬戦の中第二形態へと移行したがガオガイガーにボロ負けした

「いくぜ！！」

一夏はブレードを構え大型化したウイングスラスターを一気に吹かし
Ｊに向かうが、刹那！一瞬にしジェイダーの姿は消えた
ジェイダーは一夏の背後で腕を組んでいる

「は、速い！！」
「違うな、お前が遅いのだ」
「何ぃ！？」

急制動を掛け瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使用しＪに凄まじいまでの速度で接近する

「馬鹿、真っ正面から突っ込む馬鹿が何処に居る？しかも相手が悪すぎる」

俺が呟く
相手が悪すぎる、文字通りの意味だ　Ｊは俺が知っている中で最強の戦士
誇り高き空の戦士・・・一夏の勝率は・・・限りなく０だ
Ｊは軽く身を沈ませ一夏が水からの上を通りすぎようとした瞬間！
一夏の腹部に重々しいパンチを捻じ込ませた
一夏は咳き込みながら体制を立て直す

「少年、無駄な動きが多すぎる、そして！」

Ｊはプラズマソードを展開し一夏に斬りかかる
一夏は回避しようとする

「（くっ！この人の構えだと来るのは上段からの斜めへ！！）」

一夏は自分でＪの攻撃を回避しながら予測し誇り高き空の戦士の剣をブレードで受け止めて見せた

「そうだ、動きながら相手を動きを読み行動しろ、戦闘中に止まるのは自らを殺せと
言っているのと同じだ」

Ｊはプラズマソードを納め一夏を見た

「少年よ、名を名乗るのだ」
「お、俺の名は織斑　一夏！」
「貴様の覚悟とは何だ？」
「俺の覚悟は大事な人を護るために、強くなる！」
「それが茨の道だとしてもか？」
「ああ！俺はどんな事があっても恐れない！
！箒！鈴！セシリア！シャル！ラウラ！簪！千冬姉！先輩と凱さん！
俺の護りたい人達のために！大事な人達と生き抜くために！！」

一夏は真っ直ぐと曇りの無い眼で言い放った
Ｊはそれを見据えている
そしてＪはふっ、と笑った

「いいだろう！私の戦士の試練！合格だ！受け取れ！合格の証だ！」

するとＪが白式に飛び込み白式と融合し眩い光を放つ

『白亜の騎士、一夏よ！我が名を答えよ！！』

・・・キング・・・ブランカ・・・ジェイダー！！
そして光が収まるとそこにはキングジェイダーにような形状をし

背中からは白き翼があり、右腕には戦闘用万能錨　ジェイクォース
腰には一本の剣、両腕には反中間子砲、指部が砲門になっている１０連メーザー砲
これがＪの力を得た一夏の新たな相棒！キング・ブランカ・ジェイダー

勇者の試練その一　戦士の試練　誇り高き空の戦士と白き騎士（後書き）

ＩＳ（インフィニット・ストラトス）　勇者光臨　ＮＥＸＴ

赤と青の竜と赤い椿！

次回もこの小説にファイナルフュージョン承認！！

『絢爛舞踏（けんらんぶとう）』

これが勝利の鍵だ！

勇者の試練その二　竜の試練　灼熱と氷結の竜と赤い椿

お次は箒の試練
既にアリーナの中心部にでＩＳを展開している
さて・・・氷竜！炎竜！いってこい！

「「了解！！システムチェ～ンジ！！」」

ＩＳから変形した状態で氷竜と炎竜が飛び出しアリーナの中心部に着地するが
炎竜着地失敗・・・

「大丈夫か？炎竜？」
「あ、ああやっぱり僕は着地が苦手だ」
「・・・獅子王・・・あんなので相手が務まるのか？」
「大丈夫ですよ」

箒サイド

私の目の前には赤と青のロボットがいる
赤は先程着地に失敗していたが・・・これが私の試練の相手なのか？

「私達が試練の相手を致します、私の名前は氷竜」
「僕の名前は炎竜だ」
「私達の試練は貴方の勇気を見定めさせていただきます」
「勇気を見せてくれよ！」
「ではこれより勇者の試練その二　竜の試練を開始する」

私は空裂（からわれ）を構える

氷竜と炎竜はお互いにクレーントンファーとラダートンファーを構え
炎竜がメルティングガンを構え、氷竜をフリージングガン構えて
遠近両方の体制を取る

「オラオラオラァ！！」
「フリージングエネルギー７０％！！」

超高熱エネルギーの弾丸と超低温エネルギーの弾丸が箒に襲いかかる
空裂はエネルギー刃として放出する事が出来る事を応用して空裂に
エネルギーを
纏わせ、放ってくる攻撃を弾いていくが、パワーがあるのか刀身が
押されている
銃撃が止むと刀身が凍っていた

「何！？」
「箒殿、勇者の礼儀としてお教え致します
私にはフリージングシステムが搭載されており凍結攻撃を得意とし
ます」
「僕にはメルティングシステムが搭載されていて炎熱攻撃を得意と
しているんだ」
「凍結・・・炎熱・・・やっかいな・・・」
「じゃあ続きと行きましょう、私達の攻撃をどう潜り抜けるか！」
「見せてもらうぜ！！オラオラオラァ！！」

ライフルとガンを超連射を開始する
箒は基礎鍛錬で培った回避技術を使い攻撃をギリギリまで見て避ける
そして少しずつであるが距離を詰めていく
雨月（あまづき）を展開し突きをしレーザーを放つ
それは真っ直ぐと炎竜に向かう、がそれは盾のようなものに防がれる

「ミラーシールド！！」

レーザーは吸収され、ゲージに吸収したエネルギーがグラフ状に移動し
反射して撃ち返されるが箒は避けるが体制を崩す

「氷竜！」「炎竜！」
「「シンメトリカルドッキング！！！！」」

二人の腕は真っ直ぐに畳まれ胸のパーツが迫り上がり頭部が隠れてそして合体する、ガンが腕に装着され手が出てきて、ミラーシールドに胸に着けられる

「超竜神！！！」
「が、合体した！？」
「さあ私に貴方の勇気を見せてくれ、ダブルガン！！」

右腕となっているフリージングガン、左腕となっているメルティングガンを
同時発射連射する、炎竜、氷竜双方のエネルギーが割り増しされ威力が更に上がっている
箒は初弾を受け止めるがその威力に圧倒されそのまま倒れてしまう

「うぐぅ！」

箒はダブルガンを上昇しながら避ける

「ダブルライフル！！」

右腰に装備されているフリージングライフルと

左腕に装備されているメルティングライフルを同時一斉射する
超竜神は精密射撃モードで連射をする
その攻撃を立て続きに食らい、エネルギーがついに残り一桁となってしまった

「（ここで負けるのか？私は？一夏と戦えないのか・・・？
そんな・・・そんな事有ってたまるか！！私は・・・！！）」

その時展開装甲から放出される黄金色の粒子によって機体が金色に輝いていく

「ついに来たか・・・！」
『今回の試練の目的の一つが達成出来そうだな』

聖心は透明なディスプレイを見ている
そこには紅椿のエネルギー残量が表示されている
一桁だったエネルギーが次第に増幅されていき一気にエネルギーが潤っていき
エネルギーが全て回復した
これこそ紅椿の単一仕様能力（ワンオフ・アビリティ）　絢爛舞踏（けんらんぶとう）
完全に操れるようになればほぼ無尽蔵のエネルギーが供給される事を意味する
今回の試練は勇者にするための物だけではなく単一仕様能力が使用出来るようになってもらうのが目的でもある、そして超竜神はライフルを収めた

「？どうしたのだ」
「貴方の勇気、見せてもらいましたよ、貴方の強い思いと勇気がトリガーとなり
その力を発動させたのです、私の試練は貴方の勇気を見定める事です

今の貴方ならその力を任意で使う事が出来るでしょう、貴方の願いを叶えるため
私の力を・・・お与えします」

超竜神は光になり紅椿に飛び込んだ
そして光は紅椿を包み込んだが赤椿はそのままだった

「あれ？一夏のように変わらないのか？」
『申し訳有りません、今現在システムを適応化させておりますのでしばしお待ちください』
『新しい名前でも考えてくれよ』
「名前？そうだな・・・」

と、かなり真剣に考える箒の姿があった

勇者の試練その二　竜の試練　灼熱と氷結の竜と赤い椿（後書き）

インフィニット・ストラトス
　勇者光臨　ＮＥＸＴ
紫の狼と勇者の妹！
次回もこの小説にファイナルフュージョン承認！！

『ＡＩＣ（慣性停止結界）』
これが勝利の鍵だ！

勇者の試練その三　紫狼牙の試練　紫の狼と勇者の妹！

「では椿竜神はどうだ？」
『そ、そのまんまですね・・・』
『捻りが無いな・・・』
「では・・・紅竜神？」
『それは明らかに炎竜の要素だけが出てますね』
『僕もそれは無いと思う・・・』
「ええい！ならなんだったいいのだ！？」

・・・冒頭から箒ちゃんのネーミングセンスの無さが出てるな・・・
さていよいよお次は我が妹、ラウラの番だ
ラウラは既にスタンバっている
さて

「ボルフォッグ」
『了解しました、システムチェ～ンジ！』

ガオガイガーからパトカーが飛び出しボルフォッグが変形する

「ボルフォッグ！！」

ラウラサイド

遂に私の番が来た
この試練に打ち勝てばお兄ちゃんとお兄様と同じ力が得られる
私の相手となるロボットが目の前にいる
先程箒と戦ったのと比べると小型だ、偵察・撹乱用と見るべきか

「私が試練をお相手をする『ボルフォッグ』と申します」
「では勇者の試練その三　紫狼牙の試練始め！」

私は先制攻撃の意味を込めプラズマ手刀で攻撃する
がボルフォッグとやらはブーメランのようなもので受け止め私を弾き飛ばした

「シルバームーン！！」

手に持たれたブーメランが銀色が光り輝いていく

「ハァァア！！」

それが凄まじい速度で投げられ私に向かってくる
それを軽く避けて見せるが、それがブーメランなだけあり弧を描き私の背中を掠った
ボルフォッグはシルバームーンを受け止める

「咄嗟の判断で前に出る事でシルバームーンの直撃を避けるとは・・・
流石は聖心さんと凱機動隊長が一目置くだけの事はありますねですが・・・
それでは私には勝てません！シルバークロス！！ハァアア！！」

二つのシルバームーンを交差連結させ手裏剣のようにし投擲する
私は手刀で手裏剣の中心を攻撃するが二つのブーメランに分離し私に襲いかかってくる

「今です！ガンドーベル！ガングルー！！」

ボーイング／シコルスキー・ＲＡＨ－６６・コマンチに酷似したヘリコプターから変形したガングルー
白バイの状態から人型に変形ガンドーベルが現れる

「三身一体！！」

ボルフォッグは折り畳まれていた体を伸ばし先程とは違い大きな体になり
ガンドーベルが左腕、ガングルーが右腕となりボルフォッグと連結する

「ビッグボルフォッグ！！」

すると戻ってきたブーメランを受け止めそのまま

「４０００マグナム！！」

ガンドーベルのマフラー部からバルカンを発射する、かなりの弾がラウラに襲いかかる
ワイヤーブレードで弾を弾きそのまま接近し手刀で攻撃するが

「ムラサメソード！！」

ガングルーのプロペラ部が高速回転させ攻撃を防ぎ盾として使用するラウラはその衝撃を利用し後方に下がるが４０００マグナムの容赦ない攻撃が襲いかかる

「（くっ！近づいて攻撃を然ればあの武器で防がれ、後方に下がればこれか！！）」

「必殺！大回転魔弾！！」

内蔵ミラーコーティングを用い、全身に定着したミラー粒子を周囲に向かいに高速で飛ばす
私はそれを回避行動をとりながら反撃の手を考えるが
相手はそのまま突撃してくる

「（このままでは！！回避するのが吉か！いや！これなら！！）」

ラウラは手をボルフォッグに向け意識を集中する
するとボルフォッグの動きが停止する

「！！これは！ＡＩＣですか！？」
「そうだ！待っていたぞこの時を！！」

ラウラは右肩の大型レールカノンを構えボルフォッグに向かい連射する
真っ直ぐにボルフォッグに向かい直撃する

「しまったぁあ！！うぉぉおおお！！！」

ラウラは連射を止めボルフォッグを見ると膝を着いていた

「・・・お見事です・・・私の試練の合格条件は相手に対して自らの武器の使い
チャンスをどう活かすかです、私の試練　『紫狼牙の試練』をクリアです
貴女に私の力をお与えします」

ボルフォッグがシュヴァルツェア・レーゲンに飛び込みシュヴァル

ツェア・レーゲンと
融合し光を放つ
そして光が収まるとそこにはシュヴァルツェア・レーゲンの基本的
なボディはそのままに
肩にはボルフォッグの手裏剣が刻まれ、武装もムラサメソードの強
化発展型『レーゲンソード』
４０００マグナムの強化発展型『ガンレストウルフ』

「新しい名は・・・シュヴァルツェア・ストーム・・・！」

勇者の試練その三　紫狼牙の試練　紫の狼と勇者の妹！（後書き）

ＩＳ勇者光臨（インフィニット・ストラトス）　ＮＥＸＴ

緑と黄の龍対龍の鈴

次回もこの小説にファイナルフュージョン承認！！

『双頭龍（シャントウロン）　龍咆（りゅうほう）』

これが勝利の鍵だ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9410y/

IS(インフィニット・ストラトス)　勇者光臨

2011年12月29日02時55分発行